福岡女子大学文学部紀要
「文藝と思想」57～140頁
第 73 号　　2009 年 2 月

福岡女子大学におけるキャリア教育の試み（1）

森　　邦　昭

目　次

1　取組の概要
2　取組における学生教育の目標や養成する人材像について
3　設定する学生教育の目標や養成する人材像のニーズについて
4　取組が求める成果、効果等について
5　取組の趣旨を踏まえた目的を達成するための教育課程、教育方法等について
6　取組の実現に向けた実施体制（マネジメント体制、教職員の体制、支援体制、学外との連携）について
7　取組における大学等としての独創性又は新規性について
8　評価体制等
9　取組における教育課程、教育方法等の創意工夫について
10　取組における実施体制等の創意工夫について
11　取組により期待できる成果等の教育改革への有効性について
12　取組に関連する今日までの教育実績
13　実施体制等の今日までの経緯
14　取組の全体スケジュール及び各年次の実施計画
15　教職員と学生との関係を含めた、実施体制等の具体的な展開
16　取組期間終了後の大学等における取組の展開の予定（財政的措置を含む）
17　選定理由
18　キャリア教育とジェンダー視点を専門教育に導入する試み
19　キャリア教育用語集
20　学問キャリア導入教育特別講演会（平成19年度）
21　職業キャリア導入教育特別講演会（平成19年度）
22　福岡女子大学キャリア教育シンポジウム（平成19年度）
23　学問キャリア導入教育特別講演会（平成20年度）
24　作文コンテスト（平成19年度）
25　人生・職業・社会Ⅰ（平成19年度後期）
26　人生・職業・社会Ⅰ（平成20年度前期）
27　キャリア・デザインⅠ（平成20年度前期）

近年、日本の大学では、いわゆる「キャリア教育」への関心が高まってきている[1]。この「キャリア教育」(Career Education) という言葉はもともと、「1970年にアメリカで始まり、1980年代半ばまで続いた教育運動で、職業教育を一つの主要な柱としてアメリカの教育全体を改革する運動」[2] を指す言葉である。

当時のアメリカでは、産業や社会の構造が変化したため、高校を卒業しても就職に役立つ職業能力を身に付けていなかったり、進路を選べなかったりする若者が増加し、職業教育への批判が高まった。こうした状況で、1970年の秋に、内政担当補佐官の J. アーリクマンが、「国家予算を増額せずして連邦政府が職業教育にもっと関与する道はないものか」と呼びかけた。これに応じたのが、当時の教育長官 S. P. マーランド Jr. だった。そして、連邦教育局（現在の教育省）の成人・職業技術教育局で、苦肉の策として一つの言葉が練り出された。それが「キャリア教育」という言葉だった。

そのときには、「キャリア教育」とは、「初等、中等、高等、成人教育の各段階で、それぞれの発達に応じてキャリアを選択し、その後の生活の中で進歩するように準備する組織的・総合教育」[3] であると定義された。

日本では、平成11年（1999年）12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」で、「キャリア教育」という言葉が文部科学行政関連の審議会報告等で初めて用いられた。ここでは、次のような提言がなされた。「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育（望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。」[4]

この「接続答申」以降、文部科学省、厚生労働省、さらに経済産業省などがこぞってキャリア教育・キャリア形成支援の取組をそれぞれに精力的に開始した。大学も従来の就職対策・就職斡旋の支援にとどまらず、「就職部」や「就職課」を「キャリア支援センター」などの名称に類した組織に改組して、学生の主体的なキャリア形成を支援する学生指導を模索し始めている[5]。

もちろん、日本の大学で「キャリア教育」が流行せざるをえなくなった直接の要因としては、平成３年（1991年）のバブル経済の崩壊とその後に生じた「就職氷河期」と形容された学生の就職難が挙げられる。さらに、「採用に値する大卒者が少なくなってきた」と評される学生の変容、急速に進行す

る少子化に対応するための大学の営業政策などの要因も挙げられる[6]。

文部科学省が大学におけるキャリア教育に本腰を入れ始めたことは、平成18年度（2006年度）の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代 GP)[7]から「キャリア教育」(実践的総合キャリア教育の推進）のテーマを設定したことからも読み取られる[8]。このときは、全部で176件の申請がなされ、33件の取組が選定された。翌年度、平成19年度（2007年度）の現代 GP（実践的総合キャリア教育の推進）には、福岡女子大学も、本学がいままさに取組んでいる「大学の抜本的改革」との関連で申請を行った。このときは、全部で153件の申請がなされ、30件の取組が選定された。本学の取組も選定された。

本学の取組名称は、「男女共同参画社会をめざすキャリア教育―学生のキャリア意識と人間力を高める21世紀高度教養教育への地方公立女子大学の挑戦」である。取組学部等は、「全学」である。キーワードは、「女子高度教養教育」「ジェンダー・センシティブ」「職業キャリア導入教育」「学問キャリア導入教育」「読み書き討論能力」である。

取組期間は、平成19年度（2007年度）から平成21年度（2009年度）までの３年間である。とはいえ、この現代 GP の取組は、選定結果の通知時期等の関係上、平成19年度後期からの開始となったので、実質的な取組期間は２年半である。そこで、本学の申請の主な内容とこの１年間（平成19年度後期～平成20年度前期）の主な取組についてのまとめを本号で試みる。次の１年間の主な取組については次号で、最後の半年間の主な取組については次々号でまとめを試みる予定である。

1　取組の概要

申請書に記載された「取組の概要」(400字以内）は、次のとおりである。なお、キーワードには、下線が付されている。

> 本学では、いま全学を挙げ学部学科の再編を行う抜本的な改革の実行中です。改革の柱は、いわゆる専門教育も含めて、大学の４年間全体を女子高度教養教育として構築することにあります。この改革と連動して、本取組（福女 CE プログラム）では女子学生の「キャリア（人生）形成」と「男女共同参画社会の実現」を全学体制でめざします。
>
> ①　学生教育全体をジェンダー・センシティブなキャリア教育と捉え、

男女共同参画の意識を高めます。

② 新設のキャリア支援センターで、職業キャリア導入教育の体制を整えます。

③ 教務部会を中心に、学生を学問に目覚めさせ、学問をとおして人間力を育てる学問キャリア導入教育の体制を整えます。

④ ゼミをはじめ、各種の学生教育に作文と論評の方法を積極的に取り入れ、読み書き討論能力を着実に身に付けさせます。

⑤ 福女 CE プログラムの実施をとおして、女子学生のための高度教養教育に取組む学部教育課程を実現させます。(397字)

2　取組における学生教育の目標や養成する人材像について

女子専門の高等教育機関としての本学の学生教育の目標は、現代社会で活躍する女性に求められる総合的な基礎力を養成することにある。本取組である「福女 CE（Career Education）プログラム」では、男女共同参画社会の形成という現代社会の喫緊の課題に、女子大学の使命として大学を挙げて取組む。現状では、女性の人生キャリアには多くの困難がある。そのため、その諸課題に学生を向き合わせ、学生の意識と能力の向上を図る必要がある。内閣府「人間力戦略研究会報告書」の言う「人間力」[9] を鍛えて、高度の教養を備えた21世紀型女性市民の育成をめざす。それが本取組で養成する人材像である。

福女 CE プログラムでは、次の３つの柱を設定している。

① キャリア意識の向上……課題に鋭敏に気づき進んで担う女性の育成

② 知的実践能力の向上……問題を正しく認識して解決に取組む女性の育成

③ 実践的コミュニケーション能力の向上……適切な表現力で共同作業をリードする女性の育成

高度の教養、すなわち高いキャリア意識、知的実践能力、実践的コミュニケーション能力の３つをバランスよく備えた21世紀型女性市民の育成が、福女 CE プログラムの目的である。そのような女性市民を本学が今後ともますます多く社会に送り出すことができれば、男女共同参画社会の実現可能性も確実に高まる[10]。それがこの取組のねらいである。

3　設定する学生教育の目標や養成する人材像のニーズについて

本学学生の大半は、本県（福岡県）の出身である[11]。しかし、この地域の家庭や職場では、女性の社会進出は全国平均を下回る傾向にあり、女性のキャリア選択の幅も狭い感がある[12]。とはいえ、あるいは、だからこそ、この地域には古くから女性解放運動の伝統がある。大正12年（1923年）に本学の前身校が全国で初めての県立女子専門学校として創立されたのも、女性の地位向上を求める人々の熱意に支えられたからだった。

創立以降、本学は女子高等教育に邁進してきた。平成18年度（2006年度）からの本学の法人化に際しても、本学は女子大学として生き残る道を選択した。多くの女子大学が共学化の道を選択した結果、公立の女子大学は、全国で３校、九州中国地方では本学だけになった。しかし、この地域での男女共同参画社会の実現に向けて、本学が果たすべき役割はまだ大きいと本学では考えている。

男女共同参画社会、男女平等は、世界と日本の共通目標である。平成18年(2006年）３月に策定された「第２次福岡県男女共同参画計画」は、結婚・出産後の女性が働きにくい実情にあることなどを踏まえて、「男女共同参画社会実現に向けての人づくりと女性が活躍する社会づくり」を大目標に掲げている。

そこで、本学では新たに「ジェンダー・センシティブなキャリア教育」の体系を構築し、高い意識と能力を備えた21世紀型女性市民を育成することとした。「ジェンダー・センシティブなキャリア教育」とは、男女の社会的文化的な区分法の良い面と問題点に鋭敏に対処する生き方教育のことである。本学が現代 GP で行うこの取組は、本学に課せられた公的な責務であり、少子高齢化と格差拡大の問題を抱えた日本社会では、特に大きな現代的ニーズがある。

4　取組が求める成果、効果等について

一般に、女子学生は与えられた課題に真面目に取組む傾向にある。しかし、ときに深刻な悩みを抱え、心身の不調や不本意入学で休退学する場合も少なくない。本学の場合も、決して例外ではない。本学はいま、女子高等教育の

現代的な課題を見据えて、学部の抜本的改革を遂行中である。現代 GP の取組を通して、女子学生のための高度教養教育（21世紀型リベラル・アーツ）をめざした学部教育課程が実現するならば、これが最大の成果となる。また、学内外でも数々の効果が期待できる。わけても、次の３つの効果を重視している。

効果１……学生の意識と能力の向上（勉学意欲の高まり、就職率の向上、良質な就職先の開拓、有為な女性の輩出、大学の魅力の増大、優秀な入学志願者の増加）

効果２……FD（Faculty Development）・SD（Staff Development）により、大学の教職員に「ジェンダー・センシティブなキャリア教育」の視点を徹底させるための意識改革と能力向上

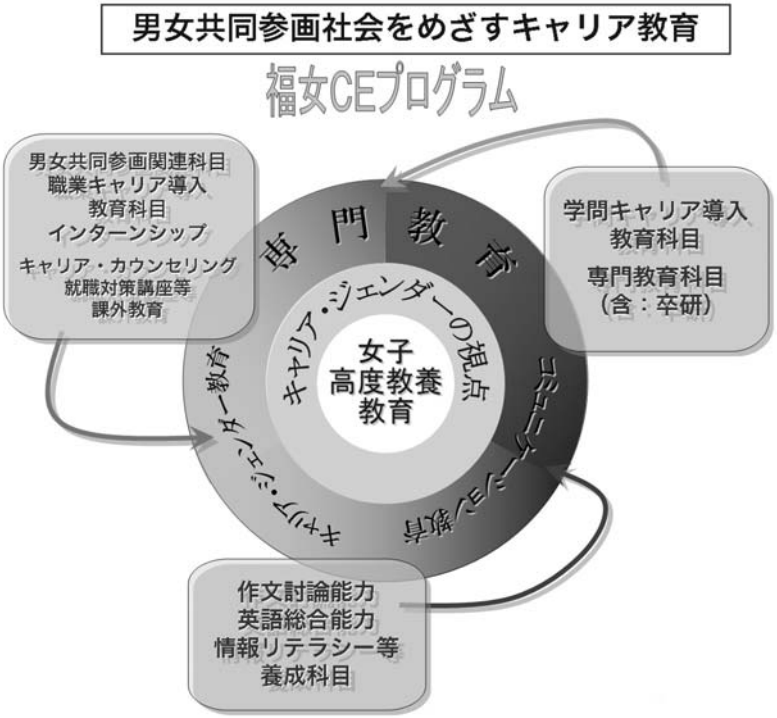
効果３……男女共同参画社会の実現に向けた社会の構造改革

5　取組の趣旨を踏まえた目的を達成するための教育課程、教育方法等について

本学の現代 GP の取組は、本学の中期計画における教養教育関連事項を、上述の教育目的のもとに統合して実施する。また、正課と課外の教育活動を有機的に配置することにも、十分な配慮を行う。福女 CE プログラムには、学生教職員の全員が連携協力して取組む。このような教育実践は、小規模の女子大学だから実現可能な教育実践であると本学では考える。

男女共同参画社会をめざすキャリア教育である「福女 CE プログラム」の全体イメージを、申請書に次のように図示した。(次頁の図を参照)

学部教育課程には、「専門教育」「コミュニケーション教育」「キャリア・ジェンダー教育」の３つの柱を立てる。しかし、この３つの柱は、孤立した個々ばらばらの柱ではない。３つの柱は、それぞれに融合して、いわば「三位一体」になっている。この三位一体は、「キャリア・ジェンダーの視点」によってもたらされる。つまり、「専門教育」にも、「コミュニケーション教育」にも、「キャリア・ジェンダー教育」にも、キャリア・ジェンダーの視点を導入して授業を成立させれば、本学のすべての授業のどの局面を切り取っても、「ジェンダー・センシティブなキャリア教育」が実施されていることになる。



「専門教育」「コミュニケーション教育」「キャリア・ジェンダー教育」のどの授業であれ、教える側は教える側からのキャリア・ジェンダー視点で授業を構成し、学ぶ側は学ぶ側からのキャリア・ジェンダー視点で授業内容を受け取る。そのようにすれば、学生はどの授業に対しても、自分なりの「学ぶ意義」を明確にして、高い意識と能力を身に付けていくと期待される。その結果、そもそもの目的である「女子高度教養教育」が達成されると期待される。

「福女 CE プログラム」で特に重視する項目として、次のＡ～Ｆの６項目を申請書に記載している。

Ａ　学部４年間を通した総合的な職業キャリア導入教育

正課の**職業キャリア導入教育科目**（全学１・２年、自由選択）４つを新設

しました。多数の講師がリレー方式で運営し、講義形式と演習形式を交錯させた授業形態をとります。教員や卒業生等との先達との対話を通して各自の人生の課題と向き合い、自己の適性と進路を見定めます。

本学では教育実習や栄養実習のほか、一部インターンシップの単位認定をしています。今後、地域の企業や団体（男女共同参画センター、福岡県・福岡市、NPO 等）と共同で**独自のインターンシップを開発**し、単位化します。活動に関する作文論評実践により事前教育と事後教育を有機的に組み合わせ、**実習体験報告会**を定期的に開催して下級生にも聴講させます。

課外の**キャリア・カウンセリング**でも事前の作文提出を求めて学生の問題意識を促すなど、独自の実践的な方法を開発します。学生各自のキャリア・デザインを支援する**講演会**を多数企画し、各界で活躍する人を**特別講師**に招きます。学生の就職希望進路別に**公務員養成講座**、**教員試験対策講座**と一般企業向けの**教養試験対策講座等**を提供します。

B　男女共同参画関連科目

社会における女性の現状と改善策を洞察するための科目（全学共通、自由選択）をさらに拡充し、一部を必修化します。

C　学問キャリア導入教育科目の新設

大学で学業に励む４年間は、各自の人生キャリアの重要なひとこまであり、職業キャリアの実現に向けて、学問で人間力を高める過程です。その基礎力養成のため、高校から大学への「転換教育」と専門コース（卒業研究を含む専門教育）への「導入教育」との機能を持つ、新たな科目群を設けます。

学問基礎論は、複数教員によるリレー方式の科目です。人間・歴史・言語・文化・社会・生活・技術・自然等を学問的に見るとはいかなることかを学生に問いかけ、知的な理解力・思考力・洞察力の鍛錬に向けて動機づけます。**学問基礎ゼミ**では、少人数クラスの作文論評活動により、人生にも学問にも必須の読み書き討論能力を徹底的に鍛えます。本学専任教員全員が担当する各ゼミのテキスト選定のために、大学で100冊程度のグレートブックス（人文、社会、自然、科学技術、国際問題、環境、宗教など）と、多数の視聴覚教材等を用意します(13)。ゼミ対抗の作文コンテストも、学生主体の運営体制で実施します。

職業キャリア導入教育	人生・職業・社会Ⅰ、Ⅱ キャリア・デザインⅠ、Ⅱ インターンシップ 特別講演 就職対策講座 キャリア・カウンセリング	⇨ キャリア・ジェンダー意識の向上
男女共同参画関連教育	女性学・ジェンダー論 男女共同参画論 ジェンダーと歴史等	
学問キャリア教育	学問基礎論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ 学問基礎ゼミ、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ 専門教育科目 卒業研究	⇨ 知的実践能力の向上
総合コミュニケーション教育	日本語：作文指導 英語：TOEIC 受験指導 情報処理：情報資格試験受験指導	⇨ 実践的コミュニケーション能力向上

D　実践的コミュニケーション能力の養成

本取組では上述のように、正課・課外の教育場面で学生の読み書き討論能力を徹底訓練します。職業と学問の実践基盤は**読み書き討論能力**にあり、これに習熟した者は理解力・思考力・洞察力にも優れます。日本語の高い実力に加え、21世紀型市民に必須のコミュニケーション能力を養成します。国際社会での高いキャリア実現のために、**英語総合能力**（読解・表現・聴解）を養成する TOEIC 対策科目を強化します。高度情報社会での高いキャリア実現のために、**コンピュータによる情報処理能力**（データ管理・文書編集・通信等）を養成する科目を拡充します。

E　全授業科目への「ジェンダー・センシティブなキャリア教育」の視点の導入

ジェンダー・センシティブなキャリア教育の視点から毎回の授業の目的を明らかにし、シラバスにも科目の目的を明示します。教員が暗黙の前提としてきた教育目的をそのつど学生に示すことで、学部教育全体がジェンダー・センシティブなキャリア教育としての意味を獲得し、人生の諸課題と学問との関連が明確になります。

F　オンデマンド学習システム

職業キャリア導入教育及び学問キャリア導入教育の効果を高めるため、プログラムの実施内容を学生がいつも好みに応じて繰り返し学べるよう、情報ネットワークを利用した**オンデマンド学習システム**を構築します。

6　取組の実現に向けた実施体制（マネジメント体制、教職員の体制、支援体制、学外との連携）について

現代 GP への申請に先立って、この「福女 CE プログラム」を推進するために、理事長兼学長を本部長とする「福女 CE 推進本部」を設けた。上述した「福女 CE プログラム」の内容は、当時の大学改革委員会、教授会等の議を経て立案された。このプログラムは、たとえば福岡県男女共同参画センターなどをはじめとする地域団体の支援協力を仰ぎながら、本学全部局の有機的な連携のもとで、全教職員の一致団結によって実施される仕組になっている。

同時に、様々な教育機関と交流して情報を収集し、教育プログラム内容の改善と発展に努める必要もある。申請書作成当時の情勢では、平成21年度(2009年度）からの学部学科再編が見込まれていたので、これに合わせて「職業キャリア導入教育と男女共同参画教育の専任教員を１名ずつ増強」すると申請書に記載した。

7　取組における大学等としての独創性又は新規性について

本学では、正課と課外にまたがる総合的なキャリア教育を始動させるに当たって、「キャリア」という問題を、広く「人間の生き方」の問題だと捉えた。女性として厳しいキャリア選択を強いられている学生・卒業生の現状と

向き合うことから、こうした「新たなキャリア教育観」が浮かび上がってきた。

学生の人生キャリア全体のなかでは、職業選択を支援するキャリア教育は、「職業キャリア」への導入教育と位置づけられる。学部学科で学問に打ち込む４年間は、「学問キャリア」と位置づけられる。このことを踏まえて、「学問キャリア導入教育科目」を新規に設置すれば、学生各自の人生・職業・社会の課題意識を有機的に統合し、学部教育全体を広義のキャリア教育と称することができるようになる。本学のキャリア教育の特色は、「職業キャリア導入教育」と「学問キャリア導入教育」を「車の両輪」とするところにある。

当然のことながら、ここでは専門教育も学生の幅広く深い教養を高度化するために機能する。男女共同参画社会の推進をめざす本学は、学問で学生の人間力を高めることによって、学生の職業キャリアの実現を支援し、学生の一生涯のキャリア形成の土台づくりの支援を行うことが重要だと考える。もとより、大学は単に専門知識を教え込む場ではなく、学生が自ら学問して何かを学び取り、人間的に成長していく場である。

本取組「福女 CE プログラム」は、個別の専門体系を自明の前提としてきた従来型の学部教育観を180度転回し、学生のキャリア実現への学問的支援という高次の教養理念を正面に掲げ、入学時から卒業時までの一貫した総合的なキャリア教育の体系を構築する独創的な試みである。

8　評価体制等

本取組は、本学の中期計画と連動している。したがって、中期計画の評価体制、方法、指標に応じて本取組は評価される。取組の期間中も終了後も、福岡県が設置している外部評価委員会により、本取組は毎年度の厳格な客観評価の対象となる。取組事項の一つひとつに関する学内評価は、「福女 CE 推進本部」が取りまとめ、関係部署に改善を促し、外部評価委員会に報告することになる。

具体的には、教務部会と FD 部会が統括して全科目で実施している「授業アンケート」(毎学期、学期の最初の頃と最後に２回、記名・記述方式で実施している授業アンケート）なども通して、学生一人ひとりの声を各担当教員がよく受け止め、その都度の自己評価に基づいて、「ジェンダー・センシ

ティブなキャリア教育」の視点から授業改善を行うことにしている。

特に「職業キャリア導入教育科目」と「男女共同参画関連科目」については、当初の２年間の試行段階において、自由選択で履修する学生の動向を見極めて、本学の抜本的改革による改組後に必修化する必要があるか、ないかなどについて、教務部会が検討することにしている。

TOEIC テストについては、英文学科の学生の80%が650点以上、それ以外の学生の80%が500点以上の得点に達することを目標にしている。コンピュータ情報処理能力関連の資格試験については、１年生で50%以上の受験、60%以上の合格率などを目標にしている。こうした取組項目の評価指針については、教務部会がこれを設定してチェックすることにしている。

9　取組における教育課程、教育方法等の創意工夫について

正課の「学問基礎ゼミ」「人生・職業・社会Ⅰ、Ⅱ」「キャリア・デザインⅠ、Ⅱ」など、課外の「インターンシップ」「キャリア・カウンセリング」などで、学生による作文論評活動の積極的な導入を図る。職場でも学問でも、読み書き討論能力は不可欠である。この能力を鍛えた学生は、インターンシップや就職活動などでエントリーシートを作成する際にも、適切な自己表現を行うことができるようになると期待される。

授業では、たとえば作文論評活動などのような学生の主体的・積極的な「活動」を重視する。活動重視の実践的な授業方法には、大講義室で学生に受身の学習を強いてきた大学教育の弊害を取り除き、学生一人ひとりの学ぶ意欲を高める可能性が秘められている。それゆえに、本学でも組織的・計画的な FD 活動を展開し、一部教員の先進的な試みに改良を重ね、独創的な教育方法を共同開発していく必要がある[(14)]。

また、学生がプログラム内容を自主的にいつでもどこでも繰り返し学習できるようにするために、オンデマンド学習システムを整備する。このシステムにも教育効果を高める可能性があると期待される。

10　取組における実施体制等の創意工夫について

本取組を立案した大学改革委員会を母体として「福女 CE 推進本部」が設

置され、全学的な実施体制が整えられた。今後は、取組関係部署間の情報連絡網を強化して、学生教育体制を恒常的に点検・改善していくことにしている。全教職員が FD・SD に取組みながら教育改革を推進することによって、本取組が本学の抜本的改革の円滑な進行に寄与し、来るべき学部改組との整合性が保たれるように配慮している。

11　取組により期待できる成果等の教育改革への有効性について

本取組では、「職業キャリア導入教育」に「学問キャリア導入教育」を重ね合わせ、専門教育を含む学部教育の全体を「高度教養教育課程」として有機的に編成し直すことをめざしている。この考え方は、近年の専門職大学院などの開設の動きにも連動している。その意味で本取組は、時代の要請にふさわしい新たな学部教育のイメージを提供する有効な教育改革のモデルになる。さらに、ジェンダー視点をキャリア教育へ導入したことは、男女共同参画社会の実現を課題とする現代日本において、女子大学のみならず共学大学でも配慮されるべき教育改革の論点を提示している。

総じて、今日の日本の学生の学力低下問題の根本原因は、知識の機械的な詰め込み型の受験勉強に疲弊した学生の学習意欲の喪失にある。作文論評活動など、学生自身が十分に活動する機会を縦横に展開する本取組は、学生各自を人生・職業・社会の課題に向き合わせ、学習意欲を向上させて人間力の陶冶につなげることによって、日本の学力低下傾向を反転させる極めて有効な教育改革機能を備えている。

12　取組に関連する今日までの教育実績

本学でも従来から課外で、就職ガイダンス、キャリア・カウンセリング、各種の就職対策講座などを実施してきた。しかし、学生のキャリア意識を高めるための学内の取組体制が十分でなかったため、期待されたほどには効果がもたらされなかった。

講義で「女性学」(４単位) を開講したのは、昭和57年 (1982年) だった。平成７年度 (1995年度) からは、「女性学」を講義２単位と少人数ゼミ２単位に分割した。「女性学」の受講生は、地域の男女共同参画センターなどに

も出向いて学習している。

平成18年度（2006年度）には、「女性学・ジェンダー論」を担当する専任教員を採用した。平成19年度（2007年度）からは、ジェンダー関連の科目を３科目新設した。これらの科目を多数の学生が履修している。

学問キャリア導入教育で今後新設する予定の「学問基礎論」にほぼ対応する科目として、現在では「人間を学問する」「科学と生活・社会」「人間の知の探求」などの科目を開講している。また、少人数での発表・討論の機会を確保するために、「個別ゼミ」(２単位、２年次学生必修）という授業科目を毎年12～16科目開講してきた。

英語教育では、平成７年度（1995年度）から、１年次学生に対して、「読み書き聴き話す」基礎能力を養成するための科目を４単位分配分している。平成18年度（2006年度）からは、１年次学生に対して、TOEIC 受験対策科目を配分して、全学的に受験を奨励し、目標成績の達成に努めている。

また、平成７年度（1995年度）から、「情報科学の基礎と演習」(２単位)を開講し、情報処理演習室の機能も拡充してきた。

13　実施体制等の今日までの経緯

県立大学時代は、学生の就職支援については、学生課と学生部委員会が業務を行ってきた。平成18年度（2006年度）の本学の法人化を機に、これを廃止し、キャリア教育の体制強化をめざしてキャリア支援センター準備部会を設けた。１年間の準備期間を経て、平成19年（2007年）４月１日に、キャリア支援センターが本学に設置された。

昭和60年（1985年)、「国際婦人の10年」の最終年に、女性生涯教育資料室が設けられた。そこでは、女性の社会的な地位向上のために、文献収集や公開講座などの活動を行ってきた。この資料室は、平成９年（1997年）に生涯学習研究センターと一旦改称したが、本学の法人化の際にセンターの性格をより鮮明にするために、女性生涯学習研究センターと再度改称して現在に至っている。

公立大学法人に移行した平成18年度（2006年度）には、FD 部会が教務部会から独立し、FD 部会の機能が強化された。

14　取組の全体スケジュール及び各年次の実施計画

申請書に記載した「取組期間中の各年次の実施計画」は、次表のとおりである。

15　教職員と学生との関係を含めた、実施体制等の具体的な展開

理事長兼学長を本部長とする「福女 CE 推進本部」では、キャリア支援センター、女性生涯学習研究センター、教務部会、FD 部会、情報センターをはじめ、本学の全部局を有機的に組織して、「福女 CE プログラム」の実施を推進する体制を確立した[15]。

こうした実施体制のもとで、現代 GP のホームページ作成、パンフレット発行などを行うことによって情報を発信するとともに、シンポジウムなどを企画して他機関との情報交流を進め、「福女 CE プログラム」の改善・発展に努める。また、福岡県男女共同参画センターなどの地域団体との一層の協力連携を図る。

「福女 CE プログラム」の実施体制のうち、主な部局の主な担当事項をまとめたものが、次の表である。

福女 CE 推進本部	全プログラムの統括・調整・推進・評価
キャリア支援センター	職業キャリア導入教育、インターンシップ、カウンセリング等の実施
女性生涯学習研究センター	ジェンダー研究、シンポジウム、特別講演会等の企画実施
教務部会	学問キャリア導入教育、男女共同参画関連教育等の開発実施
FD 部会	キャリア教育研修、ジェンダー教育研修等の企画実施

この実施体制の特徴は、「職業キャリア導入教育」と「学問キャリア導入教育」の両面から、実践的で総合的なキャリア教育課程を構築する点にある。平成16年（2004年）１月28日に提出された文部科学省審議会答申「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」にも、「キャリア教育は、学校のすべての教育活動を通して推進されなければならない」と明記されている。本学の「福女 CE プログラム」でも、一人ひとりの学生の特性を十分に踏まえ、大学のすべての教育活動を通じてキャリア教育の成果を挙げることを基本にしている。

全学生一人ひとりが学びの主人公になることが重要である。そのために、本学の授業には、作文や討論（読み書き討論能力）などを重視した新たな教育方法を積極的に導入する必要がある。また、「福女 CE プログラム」では、全教員がリレー方式の講義科目や少人数ゼミを担当することを予定している。

したがって、全教員が、学生の主体性を重んじ、全学生一人ひとりの能力開発を支援できる効果的な教育方法を習得しなければならない。

そこで、本学では、大学の教育能力を高め、教育改革を推進するために、全教職員の FD と SD を計画的に実施することにしている。具体的には、教育方法や男女共同参画に関する各種学内講演会や FD 研修、学生による授業アンケートなどをこれまで以上に効果的に実施する必要がある。

特に重視しているのは、キャリア・カウンセリングである。小規模女子大学のアット・ホームな雰囲気のなかで学生のキャリア実現を細やかに支援するために、全教職員がキャリア・カウンセリング・マインドをもって学生に接することができるようになることをめざす。そのために、キャリア支援センターの教職員を中心に、実地体験による研修（OJT＝On the Job Training）を積んで、本学独自のカウンセリング手法を開発し、外部委託だけに頼らない学内カウンセリング体制の構築に努める。

16　取組期間終了後の大学等における取組の展開の予定（財政的措置を含む）

本取組「福女 CE プログラム」は、取組期間終了後も継続する予定である。申請書作成当時の情勢では、平成21年度（2009年度）からの学部学科再編が見込まれていたので、「平成21年度新課程入学生が卒業する平成24年度をもって、第１次のプログラム実施期間は終了」と申請書に記載した。現在進行中の本学の抜本的改革の今後の推移次第であるが、いずれにしても改革後の新課程に完全に移行するまでは、現在の教育課程の開講科目は残るため、専任教員の授業担当を十分に調整しながら、FD 研修を継続して、新課程開始後の第２次のプログラム内容の充実を図る必要がある。厳しい状況に置かれてきた地方の女子学生のため、課外の実施事項についても、本学は大学としてできるかぎりのことを実施し続けていくつもりである。

今回の現代 GP への応募は、本学の大学改革の発火点になっている。本取組「福女 CE プログラム」が選定されるか否かにかかわらず、本学はこの取組を実施することにしている。取組期間終了後の財政的措置については、福岡県が示した中期目標に従い「学部学科を含めた抜本的な改革」を行う本学は、福岡県と協議することにしている。

17　選定理由

以上（1〜16）において、現代GPへの本学の申請の主な内容を紹介した。このような申請内容に対して、次のような「選定理由」が示された。

専門教育を含む学部教育全体を高度教養教育課程として位置づけ、それに、職業キャリア導入教育、男女共同参画関連教育、学問キャリア導入教育の各プログラムを連動させて、キャリア形成と男女共同参画社会の実現を目指したジェンダー・センシティブなキャリア教育の体系を構築するという取組は、新規性、独創性が高く評価されます。

正課と課外にまたがる総合的キャリア教育を、人間の生き方として捉え、入学から卒業までの４年間を、学問キャリア教育と位置づけ、知的実践力と実践的コミュニケーション能力を高め、全体でその目的を共有していることは優れている点と評価されます。

キャリア教育とジェンダー視点を職業教育、専門教育に導入した点では、プログラムとしては優れたものと評価されますが、実施上の課題としては、専門教育との具体的関連内容、および「学生一人ひとりが学びの主人公となる」ための「新たな教育方法」の具体像をより明確にすること、また、男女共同参画関連科目の拡充、必修化の内容や、オンデマンド学習システムのプログラム領域・ソフト数・内容等の明確化と充実化が求められます。

４年間一貫した総合的キャリア教育の体系によって、専門教育を含む学部教育を編成し直すことが可能となれば、現在の教育方法と比較して効率の向上・新付加価値の創出に貢献する要素があると認められ、他の女子大のみならず共学校の教育改革に参考になる取組として期待されます。

起承転結型の文章構成の第３段落において、本学の取組に対して、いくつかの「実施上の課題」が指摘されている。これらの課題には今後十分に対応していかなければならないが、「専門教育との具体的関連内容」という課題に対しては、平成19年度（2007年度）後期に、「キャリア教育とジェンダー視点を専門教育に導入する試み」としてさっそく取組んだ。つまり、各教員が専門教育の授業を行う際に、その授業内容が「キャリア教育とジェンダー視点」からどんな意味をもつのかを各教員に意識してもらい、その意味内容

を授業内容に各教員の自由裁量で織り込んでもらうようにした。

18　キャリア教育とジェンダー視点を専門教育に導入する試み

この試みには、専門教育の授業内容のなかにキャリア教育やジェンダーの視点を適宜導入するという段階から、むしろキャリア教育やジェンダーの視点から専門教育の授業内容そのものを構成するという段階まで、さまざまな方式の試みが考えられる。しかし、最初のとりあえずの試みでは、各教員が取組みやすい方式で試みるところから始めた。

とはいえ、「キャリア教育」と「専門教育」には、もともと密接な関係がある。1971年にアメリカで「キャリア教育」(Career Education) を提唱したS. P. マーランド Jr. の考え方によれば、「キャリア教育」とは「キャリア志向の教育」のことである。マーランドたちは、「キャリア教育」を行うことによって、学校教育そのものを「キャリア志向の教育」に再構築することをねらっていた。

大学においては、マーランドの提唱の原点に返れば、学部学科の専門教育そのものを「キャリア志向の教育」に再構築することが「キャリア教育」の基本になる。就職指導や進路指導に相当する特別メニューの授業やサービスをキャリア教育と称するのは、本来の「キャリア教育」の誤用であるとさえ言える。

この意味で、次の指摘は極めて重要である。「伝統あるわが国の大学の多くは、旧制高等専門学校から出発した。師範学校も含め旧制高等専門学校は、農林、医、薬、工、経済、師範などそれぞれの分野で“キャリア志向の教育”を行い、人材を輩出してきたのである。それがいつの間にか、ほとんど例外なく研究大学のように“姿”を変え、学生や社会の期待から逸れた路線を走っている、と感じるのは筆者だけだろうか。“キャリア教育”強化という看板または暖簾を掲げるのであれば、創立時からの歴史を振り返り、大学という教育機関の本質を原点に返って見直してみる必要がある。」[16]

また、就職指導や進路指導に相当する特別メニューの授業やサービスをキャリア教育として大学で実際に担当しているいわゆる「キャリアカウンセラー」の座談会においても、そのような特別メニューのキャリア教育だけが「キャリア教育」ではなく、むしろ大学教育そのもの、大学の専門教育が「キャリ

ア教育」であり、これが「正論」だと言われている[17]。

特別メニューのキャリア教育だけではなく、「正論」の「キャリア教育」に取組むのが、本学の「福女 CE プログラム」である。平成19年度後期の取組では、文学部英文学科の専任教員の全員（８人）から、各自が専門教育科目の授業でそれぞれに試みた結果が報告された。事例１～事例８として紹介する。

【事例１】

アメリカ文化論の授業で、白人・男性主流文化の抑圧により、マイノリティが希望の職業選択をすることがいかに困難だったかを講義した際、職種に関係なく、与えられた職業を通じて自己実現をめざし、明るい将来に向けて差別のない社会を作る努力をすることが、若い世代の責務だと説いた。

すると、学生たちは、日本に先立ってアメリカがキャリアやジェンダーの問題に真剣に対応していることを知り、授業に対する関心を強め、主体的・積極的に授業にかかわるようになった。

【事例２】

論文講読による理論把握とデジタル・コーパスを用いた実際の調査を組み合わせ、言語の共時的、通時的多様性について分析・理解することをねらいにした少人数（７人）のセミナーで、たとえば集団面接での議論を想定させ、人に聞かせる発話法、疑問点の整理と発表の仕方、簡潔な応答の仕方などを意識しながら学生が議論するように促した。

すると、学生たちは、声量も大きくなり、明快な質問、説得力のある応答ができるようになった。

【事例３】

ネイティブ・スピーカーによるスピーチの授業では、グループを前にして英語で話す基本スキルを学ばせた。スピーチの場合、話すスキルだけでなく、話す内容も問題になる。学生が自分の意見をまとめる際、ジェンダー、コミュニケーション、キャリアの相互関係にも留意するように促した。

すると、学生たちは、スピーチの内容とスキルを向上させ、自信をもって自立的思考ができるようになり、具体的な将来展望をもつようになった。

【事例４】

ネイティブ・スピーカーによるライティングの授業では、当該教員のテキ

スト『世界を見る20の方法』（*Twenty Ways to See the World*）を用いて、たとえばJICAなど、学生の卒業後の多様な進路について作文を書かせた。つまり、英語のライティングの授業を通してのキャリア教育を行った。

すると、学生たちは、自分たちの将来の可能性について、具体的にさまざまなことを知るようになり、自分自身の生き方（life paths）について意識と能力を高めた。

【事例５】

英語を母語とする研究者の論文を学生は無批判的に受け容れがちだが、英語の語法に関して、国際的に評価が高い学術誌に掲載された研究論文を読んだセミナーで、「権威」とされるものであっても、自分の頭で判断して批判していく姿勢の大切さを強調した。

すると、学生たちは、著者の主張を批判したり、自分の考えや新たな展開の可能性などを積極的に議論したりするようになった。

【事例６】

映画『恋に落ちたシェイクスピア』のシナリオを丁寧に読み、映画を鑑賞し、毎回その一部を暗誦し、授業の最後では学生に配役を決めて実際に演じてもらう初級演習で、キャリア・ジェンダーの視点からのディスカッションを行った。

すると、学生たちは、これから自分が生きていく世界で、社会にどう対処し、独自の生活を築いていけばよいかを、400年前と現代の社会を比較しながら考えられるようになった。

【事例７】

日本語・英語の新聞、雑誌、インターネットの関連記事を抜粋しながら、イギリスの時事問題を扱ったテキストの内容補足を行ったメディア英語の授業で、学生が正確に自分の意見をまとめ、聞き手を意識しながら伝えることの重要性を強調した。

すると、学生たちは、異文化を理解するだけでなく、一人ひとりが発信者として自分の意見をもち、積極的に社会参加していく意識と能力を高めた。

【事例８】

英文学史の授業では、女性作家を意識的に取り上げ、キャリアの文学表象に見られる変遷の検討に時間を割いた。現代の日本社会との関連、共通性に注意を促し、学生本人のキャリアとのかかわりを考えてもらうように留意し

た。たとえば、「キャリア＝職業＝経済的自立に不可欠」という現代では一般的な考え方に対し、ほんの150年ほど前には、「労働で金銭を得ること自体が卑しい」とされていたことを紹介した。

すると、学生たちは、こうした情報が面白く役立った、と授業アンケートで回答した。

19　キャリア教育用語集

本学では、学内の学生教職員間の共通理解を図り、また学外の諸機関との連携協力を深めて、「福女 CE プログラム」を推進していくために、このプログラムで使用している主な12の用語について、「福岡女子大学キャリア教育用語集（H19年度版)」というかたちでまとめを試みた。その内容は、次のとおりである。

・高度教養教育

本学のキャリア教育は、学生自らが学問することで人間力を陶冶する、高度教養教育として実施されます。学生は入学時から、学問的な読み書き討論の徹底訓練により、理解力・思考力・洞察力を養います。卒業研究を核とする専門教育も、単に専門の知識技能の習得のためでなく、共通教育で培われた幅広く深い教養を高度化するために機能します。真の学力を身につけた学生たちは、卒業後にどの分野を選択しても、すぐれた課題解決能力を発揮し、活躍することでしょう。本学の学生教育は、そのようにして学生の職業キャリア実現を支援し、一生涯のキャリア形成を援護します。

・キャリア教育（Career Education＝CE)

キャリアとは、単に職業上の成功を言うのではなく、広く人の一生の行路や経歴をさす言葉です。各自の職業選択も、基本的には人間の生き方の問題です。本学の学生教育は、キャリアという言葉の深く豊かな含意を大切にします。そして課外の就職対策支援だけでなく、正課と課外を総合した実践的なキャリア教育を実施します。

・職業キャリア導入教育

働くことの人生上の意義、社会的な意味を学生自身が考えるために、「人生・職業・社会Ⅰ、Ⅱ」と「キャリア・デザインⅠ、Ⅱ」を正課に設け、学

生どうしが討論し、論評文を書き、発表します。課外のキャリア・カウンセリングや講演会でも作文実践を重視して、社会で活躍する精神的基盤作りを目指します。各種就職対策講座も充実させます。

・ジェンダー・センシティブ

本学は、日本に僅かとなった公立の女子大学として、男女共同参画社会（Gender Equal Society）の実現に向け、学生教職員一丸となって貢献します。ジェンダーとは、文化的・歴史的に形成された男女の性別枠組みをさす学術用語です。そしてジェンダー・センシティブとは、既存のジェンダー枠組みの良い面と問題点とを鋭敏に嗅ぎ分けて、社会の課題を感知する、豊かな感覚能力を備えた、男女の生き方や教育のあり方を表す言葉です。

・男女共同参画関連科目

福岡女子大学のキャリア教育は、女性としての自己の一生と、社会における女性の位置づけと、人間の働く意味とを理解し考える、21世紀型の自立した女性市民を養成します。女子学生のための高度教養教育に全学で取り組み、男女共同参画社会の形成に寄与するために、共通教育の中核に男女共同参画関連科目を配置します。学生たちは「女性学・ジェンダー論」「ジェンダーと歴史」等の科目において、社会における女性の現状を認識し、自己と社会の課題に気づき、改善策を討論します。

・福女 CE プログラム

女子学生の「キャリア（人生）形成」と「男女共同参画社会の実現」を全学体制でめざす本学の取組は、「福女 CE プログラム」と呼称されます。「福女」は福岡女子大学、「CE」はキャリア教育の略称です。本学は福女 CE プログラムを実施することで、学部４年間全体を女子高度教養教育の課程として構築し直す、大学の抜本改革に取り組んでいます。

・GC 視点

女子高度教養教育としてのジェンダー・センシティブなキャリア教育（Gender Sensitive Career Education）に、全学を挙げて取り組むために、これを「GC 視点」あるいは「キャリア・ジェンダーの視点」と呼称します。学部教育の全科目に GC 視点を導入し、GC 視点からの教職員の意識改革と能力開発を進めます。

・学問キャリア導入教育

大学４年間は長い人生キャリアの重要なひとこまであり、個々の学生が学

問で人間力を高める大切な行程です。学生の学問キャリアの円滑な形成には、①高校までの学びを再編成し、②広い学問世界の中で各自の専攻の意義を見出して、③自主的な卒業研究の達成に向かう、段階的なキャリア形成の支援が不可欠です。学問的な読み書き討論の実践を通じて、学生の理解力・思考力・洞察力を養う学問キャリア導入教育科目は、この各段階の学びに有効に作用して、本学での各自の充実した学びを実現します。

・読み書き討論能力

正課と課外の教育場面で、学生の読み書き討論能力を徹底訓練します。学問と職業の実践基盤は読み書き討論の能力にあり、これに習熟した者は理解力・思考力・洞察力にも優れます。福女 CE プログラムは、書いて考え、考えて書く、作文（論評文）実践を重視し、学生主体の作文コンテストも実施しています。

・三角（参画）討論

大人数のクラスでも学生主体の演習を実施するために、３人ずつの学生グループをつくり、作文発表と討論を行う、三角討論を複数の授業科目に導入しています。３人グループは、最小単位の社会であり、これに参画する全員が均等かつ頻繁に発言機会を得られます。学生たちは、普段と違う仲間の姿に刺激され、目を輝かせて活発に討論しています。

・総合コミュニケーション教育

日本語による作文実践や三角討論により、基礎的な人間力に裏打ちされた豊かなコミュニケーション能力を養うとともに、英語総合能力（読解・表現・聴解）やコンピュータによる情報処理能力（データ管理・文章編集・通信等）を鍛えて、21世紀型市民に必須のコミュニケーション能力を養成します。

・オンデマンド学習システム

職業キャリア導入教育科目、及びキャリア・ジェンダー教育関連のシンポジウムや講演会等の内容を電子情報として加工編集し、情報ネットワークによって学生がいつでも繰り返し学習できるシステムを構築しています。

20　学問キャリア導入教育特別講演会（平成19年度）

本学のキャリア教育の取組「福女 CE プログラム」では、「学問キャリア導入教育」と「職業キャリア導入教育」を「車の両輪」としている。このそ

れぞれの教育効果を高めるために、それぞれに学外の有識者を招いて特別講演会を開催することとした。また、本学のキャリア教育全体の改善発展に努めるために、キャリア教育に関するシンポジウムを開催して、他大学・他機関と情報交換し、本学の取組に関して広く意見を求めることとした。

この３つのイベントは、「学問キャリア導入教育特別講演会」「職業キャリア導入教育特別講演会」「福岡女子大学キャリア教育シンポジウム」という名称で開催することとした。この３つは、福岡女子大学の現代 GP のいわば「三大イベント」である。この催しを通じても、学生の意識と能力の向上と教職員の FD・SD の充実を図っていく。

平成19年度の「学問キャリア導入教育特別講演会」は、平成19年（2007年）12月14日に本学で開催した。講師は、国際基督教大学（ICU）教養学部理学科教授のグラント R. ポゴシャン氏に依頼した。本学がキャリア教育のそもそものあるべき姿の教育として「女子高度教養教育」を掲げているところから、講演テーマは「国際基督教大学のリベラルアーツ教育」とした。

参加者は、一般10人、学生９人、文学部教員16人、人間環境学部教員20人、事務職員22人の77人だった。

ポゴシャン氏によれば、リベラルアーツとは何かについては、いろいろな説明はあるが、唯一の定義はない。たとえば、リベラルアーツ教育とは、われわれ人間が世界のなかのどの位置にいるかを理解するための教育、きれいな社会をつくるための教育、環境をつくるための教育などということがよく言われるが、よくわからない。しかし、リベラルアーツがヨーロッパ中世の自由七科（Septem Artes Liberales）から由来しているのは確かである。自由七科は、三学の文法、修辞、弁証（Trivium: Grammar, Rhetoric and Logic）と四科の幾何、算術、音楽、天文（Quadrivium: Geometry, Arithmetic, Music and Astronomy）から成る。これらの教育が最もよい教育だと言われていた。リベラルアーツのアーツとは、美術とか芸術とかの意味もあるが、ここではそうではなくて、「スキル」つまり「技」の意味である。リベラルアーツでは、アーツが自由になるのではなく、人間が自由になってさまざまな技術を駆使する。キケロの言葉に「技術者には自由性が必要だ」という言葉がある。人間が自由になってはじめて、よい技術ができる。グローバルに考えたり、批判的に考えたりする場合には、自由性が必要である。

リベラルアーツ・カレッジは、もともとはヨーロッパから始まったが、現

在ではアメリカで最も普及している。主に東海岸にたくさん存在する。質も高いし、ニーズも高い。学費も高い。ブティックのような大学である。日本にも教養学部や教養教育は存在するが、ほとんどの場合、大学全体が教養大学になっていない。日本語版ウィキペディアによれば、日本にあるアメリカ型リベラルアーツ・カレッジは、国際基督教大学、津田塾大学、国際教養大学、宮城学院女子大学、相模女子大学などである。これらの大学は、大学全体が教養大学になっている。

ポゴシャン氏が受けたモスクワ大学の教育は、国際基督教大学の教育とまったく違っていた。両者は対極にあるとさえ言える。モスクワ大学では、一般教育なし、科目選択の自由性なしで、５年間数学ばかりだった。しかし、国際基督教大学に来てからは、専門の勉強以外のこともたくさん勉強し、教育活動でもたくさん働いたので、ポゴシャン氏の人生は豊かになった。

国際基督教大学の教育を受けると、もっと勉強する力、卒業後にも勉強する力がつく。正しいリベラルアーツ教育を受けると、勉強のスキルができる。深く勉強することも、広く勉強することもできるようになる。リベラルアーツ教育は、自分から創造性と責任をもって学習を望む学生、自分から可能性を求める学生のための教育である。

アメリカの NACE（National Association of Colleges and Employers）の調査結果では、雇用者の立場から見ると、科学、技術、工学、数学を専門とする若者が不足している。これは国際的にそうである。しかし、雇用者が最も重視しているのは、「正しいスキル」(right skills）であり、「正しい知識」(right knowledge）ではない。特に、「他のことにも能力を転移させるスキル」「書き言葉と話し言葉によるコミュニケーションスキル」「複雑な問題を解決する能力」「新しい職場環境に順応する能力」が重視される。

これらのスキルや能力を伸ばす教育が、リベラルアーツ教育である。国際基督教大学の学生は、卒業時に進学にせよ就職にせよ、ほとんど問題なく進路が決定する。しかも、ほとんどが希望どおりの進路である。

日本は資源が乏しいので、科学技術で産業を維持していく必要がる。そのために専門教育はぜひ必要である。しかし、リベラルアーツ教育も必要である。結局、両方が必要である。knowledge も skills も、つまり学力も学習能力も必要なのである。そのバランスが重要である。カリキュラムでは、ディシプリンとインターディシプリンのバランスが重要である。ディシプリンが

狭すぎても浅すぎてもいけない。自由選択科目と必修科目のバランスが重要である。バランスのよいカリキュラムをつくらなければならない。また、リベラルアーツの基本として、文系の科目と理系の科目を学ぶことが重要である。文系の学生と理系の学生が一緒になって、特に理科を学ぶことが重要である。

以上のような講演の後、質疑応答に移った。３つの質問が出された。最初の質問は、一般教育と専門教育のバランス、skills と knowledge のバランスが重要であるということだったが、このバランスは自然に生まれるのか、それとも教育で育てるのかという質問だった。これに対して、次のような回答があった。学生をつねに勇気づけながら、回答を用意していくことが重要である。ガイダンスやオリエンテーションでモデル・スケジュールを示す必要がある。教員がアドバイスしながら学生に学習させることが重要である。そのようにして学生に学習させると、学生の活動が高まる。学生が育つことが大事で、そのためにはアドバイスを行わなければならない。

次の質問は、ICU の卒業生が日本社会で浮いてしまうというようなことはないかという質問だった。これに対して、次のような回答があった。オープンに物を言う人が多いということもあるかもしれないが、特殊な能力をもっている人は多い。卒業してから、「ICU の理科教育がよかったということがわかった」と言う卒業生が多いことは事実である。

最後の質問は、福岡女子大学では、高度教養教育の教育体制構築をめざして大学改革を進めているところであるが、専門教育の位置づけ方についてどう考えるべきかという質問だった。これに対して、次のような回答があった。いろいろなところでバランスが重要だと言ってきたが、そうなると ICU の教員はハード・ワークを強いられ、とても忙しい。しかし、学生がいい。学生がいいから、教員がコミットせざるをえない。教員がコミットすると学生はさらによくなる。このことは循環している。したがって、教員の人事が重要になる。採用人事では、専門研究とリベラルアーツ教育のバランスがとれ、両方とも優秀な人物というのを選考の基準にしている。大学では、あくまで学生教育が中心である。

21　職業キャリア導入教育特別講演会（平成19年度）

平成19年度の「職業キャリア導入教育特別講演会」は、平成20年（2008年）１月22日に本学で開催した。講師は、大分大学学生支援部キャリア開発課長で産業カウンセラーの佐藤眞一氏に依頼した。学生のキャリア形成支援を実際にどう行うべきか、また支援した結果、実際にどんな効果がもたらされるかなどについて、豊富な事例も紹介してもらうために、講演テーマは「女子学生の自立とキャリア形成教育の今日的意義」とした。

参加者は、一般８人、学生４人、文学部教員17人、人間環境学部教員17人、事務職員20人の66人だった。

まず、女子学生の自立が要請される背景として、佐藤氏より次の７点が指摘された。①少子高齢化社会の進展と若年労働力の不足、②女性・老人・外国人の活用、③男女共同参画社会の実現、④女性の経済的自立、⑤働く女性の環境作り、⑥子育てを含むライフ・プランの中での女性のキャリア形成、⑦社会における女性リーダーの養成の７点である。いずれにしても、今後の日本社会では、女性の活躍が期待されているし、女性が活躍してくれなければ、日本社会が立ち行かなくなる危険性もある。

ところで、「キャリア」とは、「自分らしい生き方・働き方」のことである。人生や職業において目標に向かって進んでいく姿そのもの、職業や進路など仕事にかかわる人生そのもののことを「キャリア」と言う。したがって、すべての人が「キャリア」をもっている。この「キャリア」は、長いスパンの「ライフ・プラン」のなかで考えていく必要がある。「キャリア形成」とは、狭義の「職業キャリア」からさらに発展して、人生の生涯にわたるライフ・プランを自らデザイン（設計・構想）することである。自分の人生をいかに生きるかがキャリアである。

大学の外から大学に期待していることと、大学が考えている外から大学に期待されていることとの間にはギャップがある。たとえば、そのギャップの一つとして、「大学生に求められる能力」がある。大学では、勉強ができる学生がいい学生だと考えられがちだが、大学の外からは、コミュニケーション能力、積極性、行動力、主体性、協調性、問題意識、明るさなどが学生に求められている。企業は、即戦力になる学生を必ずしも求めているわけではなく、潜在的な能力のある学生を求めている。大学では、「軸」をもった学

生を育てることが重要である。

そうなると、早い段階での「キャリア形成教育」が喫緊の課題になる。大学卒業後3年の離職率は35%である。大分県では45.4%である。「何のために就職したか」とさえ言える状況である。今の若者は、勉強するにせよ働くにせよ、「何のために」という部分が欠落している。入学したばかりの学生がすでに目標を見失って、大学４年間を漫然と過ごしてしまう場合もある。

就職活動は３年生から始まるが、そのときにはすでに勝負はついている。したがって、キャリア支援では、出口支援もさることながら、入口での支援が重要である。たとえば、勉強したことを社会で生かすために勉強するなど、何のために勉強するのかを学生に考えさせなければならない。何のために働くかについても、単に就職内定の獲得をめざすのではなく、社会貢献、自己実現、経済的自立などの要素を含めて考えさせなければならない。大学に入った早い段階で、４年間の目標設定をすることが重要である。

大分大学では、平成18年（2006年）の７月に「キャリア相談室」を設置して、週に３日、３人のキャリアカウンセラーによって、学生のどんな相談にも応じる体制を整えた。設置後８ヶ月の間に、延べ人数で426人、実人数で300人の利用があった。相談内容は、エントリーシートの書き方（147件）、面接の受け方（107件）などが多い。しかし、ここではあまりキャリア形成支援は必要とされない。それに対して、自分に向いている職業がわからない、自分が何をしたらよいかわからない、就職活動がうまくいかないなどの相談内容は、それぞれ25件、23件、７件で、数としてはそれほど多くないが、ここには根本的な問題が潜んでいて、キャリア形成支援がぜひとも必要である。

具体的な相談事例が３つ紹介された。最初の事例は、「何社受けても受からない。就職活動をやめてフリーターになろうか」という相談事例である。カウンセリングの結果、この学生の場合、自己肯定観の喪失、つまり試験で何度も落とされて自分を否定された気持ちになり落ち込んだのが、就職活動がうまくいかない原因になっていたことがわかった。カウンセリングで、これまでの就職活動をじっくりと振り返らせ、自分が何をしたいのかを冷静に見つめ直させた。すると、この学生は、カウンセリングで肯定され、励まされたことによって、自信を取り戻し、内定を獲得した。

次の事例は、「パソコンやIT関係が好きだが、何をやりたいのかが見出せなかったので、就職活動はまったく行わなかった」という相談事例である。

この学生は、卒業が迫ってきたので、しょうがないということで、たまたまアルバイトをしていた会社に嫌々ながら就職した。しかし、入社後１ヵ月で仕事を辞めてしまった。その後、ハローワークに行ったところ、次の会社がすぐに決まったのでそこで働いたが、その会社も１ヵ月で辞めてしまった。しかし、その後、職業適性検査を受けた結果、IT に適性があることがわかった。たまたま父親が勤めている会社で情報システム部門の正社員を募集していたので、試験を受けたところ、合格して採用された。嫌な仕事はなかなか続かないという事例である。

最後の事例は、「公務員試験をめざして２年間勉強したが、どうしても合格しそうにないので、民間企業への就職に切り替えたい」という相談事例である。カウンセリングで、「なぜ公務員をめざしていたのか」「公務員になってどんなことがしたいのか」を尋ねたら、この学生は自分から公務員をめざしたわけではなく、「安定しているから」という理由で親が勧めるので受験勉強をしていたという。公務員をめざすにせよ、民間企業に就職するにせよ、自分自身が考える必要があるというアドバイスを行った。すると、その後、カウンセリングを進めていくなかで、市役所の環境部門の仕事がしたいという目標が見えてきて、市役所の採用試験に合格した。

講演者自身の体験では、大学時代のゼミの先生の生き方そのものが自分自身への教育になった。学問の分野でも一流の先生であったが、教育者でもあった。当時はキャリア教育という言葉はなかったが、今で言うキャリア教育がなされていた。就職のことなどにも親身になって学生に尽くす先生だった。その先生が人生における師となった。

また、学生支援 GP 審査会委員の体験からは、次のようなことがわかった。GP に熱心に取組む大学は、生き残りをかけている。GP が採択されている大学は、やはり実績もあり、企画も斬新で、新規性・独自性がある。プログラムの名称は、大きなポイントになっている。ヒアリング時のプレゼンテーション力は、大学間にかなりの差がある。大学トップの意気込みが伝わってくる大学と、そうでない大学がある。

最後に、キャリア形成教育の展望が述べられた。学生はコンビニに来るような単なるお客様ではなく、これからの社会を担うわれわれの後輩であり、われわれが教育という手法で作り上げる作品である。キャリア形成教育に熱心に取組む大学は今後生き残っていく可能性があるが、そうではない大学は

厳しい。学長のリーダーシップのもとでキャリア支援教育を大学改革の課題として位置づけていく必要がある。教員・職員・学生が三位一体となってキャリア形成教育を推進しなければならないが、中心の軸はあくまで学生である。学生中心の大学づくりが重要である。

以上のような講演の後、質疑応答に移った。次の①～⑦のやりとりがなされた。

①【質疑】大学時代の恩師が実質的にキャリア教育に相当する教育を行われていたということだったが、具体的にはどんなことをなさっていたのか。また、学生が早い段階から目的意識をもつ必要があるということだったが、具体的にはどの段階から目的意識をもつべきなのか。【応答】教育とは、自分の後継者を育てることである。恩師の生き方・姿勢を見習いながら、学生は育っていく。研究と教育は分離されるものではない。不本意入学の場合、自分の自主的な選択がなされていない。今は、大学だけでなく小・中・高でもキャリア教育を熱心に行っている。職業と学問は結びついていて、切り離されているわけではないことを教えている。企業が大学に、大学が高校にいろいろな要望を出すという構図もあるが、それぞれの段階で学ぶべきことを学ばせることが重要である。

②【質疑】キャリアカウンセラーによる学生支援が効果的だということはわかったが、教員が同じように効果的な支援をするためにはどうすればよいか。【応答】学生が何を求めていて、どういう気持ちでいるかということを、教員が察知するように努めることが重要である。専門的な支援を行いたければ、カウンセリングなどの勉強をする必要がある。しかし、「ごく自然に学生の声に耳を傾けようとする姿勢」があれば、学生支援はできるのではないか。学生が本当に何を言いたいのかを把握するためには、表面的な言葉だけではなく、感情や状況などを含めてじっくり聞く必要がある。いずれにしても、学生が言うことをよく聞いて応えていけば、学生は相談してくる。人間としての生き方について、自分なりの考えを言えばよいのではないか。

③【質疑】教員・職員・学生の三位一体ということの重要性はわかるが、学生の親や家族はどうなるのか。【応答】学生に対して行うカウンセリングでは、必ず親は出てくる。しかし、そのとき最も重要なのは、「学生本人がどう考えるか」である。親や家族は学生本人に対して責任を取れない。最終的に判断し責任を取るのは、学生本人である。この考え方をしないと、たと

えば「誰々が言ったから」などの「逃げの口実」ができてしまう。自分で選択した学生は、頑張りがきき、困難を乗り越えようとする。

④【質疑】早い段階からのキャリア形成教育が重要だということだったが、大分大学では低学年の学生に対して、講演会などで「キャリアとは何か」というようなことについて教えているのか。【応答】さきほど、３年生、４年生になってからでは「手遅れ」というようなことを言ったが、長い人生から見れば、そこからスタートしても何の問題もない。早い段階というのは、思ったときが早いとき、気づいたときが早いときである。大分大学でも講演会などで「キャリア」について実際に教えているが、学生が気づかなかったらそれまでである。大学が全学生に向けて行う教育と、個別の学生に対応するカウンセリングを、うまく循環させる必要がある。

⑤【質疑】教員・職員・学生の三位一体は、どのようにしたらできるのか。大分大学ではどうしているのか。【応答】まずは、ピア・サポーター制度など、三者が一緒になれるような制度をつくることではないか。大学の一つの制度として、先輩の学生が後輩の学生を指導する「学生相談員制度」などをつくることも考えられる。日本の社会には、先輩が後輩を育てていく仕組がよくある。サークル活動などでも同じではないか。本音のコミュニケーションができる場をつくることが重要である。

⑥【質疑】恩師の生き方や姿勢から大きな影響を受けることがあるのは事実であり、それにたいへん共感するが、そのような立場から見たときに、今日の大学で実施されている「学生による授業評価」の問題をどう思うか。【応答】学生が授業を評価するというのは、「授業の評定」ではなく、「今後よりよい授業をするためのフィードバック」と捉えることもできるのではないか。

⑦【質疑】大学生に求められる能力で言われる「コミュニケーション能力」とは何か。【応答】教員間、教員と学生の間、あるいは一般に職場でもどこでも同じで、相手が何を言っているのかを理解することが重要である。まずは、相手が言っていることを正確に理解するという能力がコミュニケーション能力である。企業が大学生に求める能力は、まさにこの能力である。それ以上の特別な能力を要求しているわけではない。コミュニケーション能力にもいろいろな能力があるだろうが、ここでのコミュニケーション能力とは、特別の能力ではなく、仕事の円滑な遂行のために「普通に」要求される能力

のことである。たとえば、隣席の人に要件を伝えるのに、直接話しかけるのが難しいのでメールを送るというようなケースがあるが、この場合は普通のコミュニケーション能力があるとは言えない。また、この意味でのコミュニケーション能力には、人間関係構築能力、場の空気を読む能力なども含まれると考えられる。

22　福岡女子大学キャリア教育シンポジウム（平成19年度）

平成19年度の「福岡女子大学キャリア教育シンポジウム」は、平成20年(2008年）２月15日に、福岡市中央区天神にあるソラリア西鉄ホテルで開催した。最近の文部科学省の政策動向を本学の「福女 CE 推進本部」で見極めて、このシンポジウムの総合タイトルは「大学教育の実質化と女子キャリア教育」とした。

まず、筑波大学特任教授兼キャリア支援室長の渡辺三枝子氏に、基調講演「女子学生のキャリア形成」を依頼した。続いて、総合タイトルのもとで開催するパネルディスカッションのパネリストには、広島大学キャリアセンター教授の森玲子氏、京都女子大学現代社会学部教授の槇村久子氏、金城学院大学人間科学部教授兼学生部長の宗方比佐子氏、東京女子大学文理学部教授兼キャリアセンター長の今村楯夫氏の４人に依頼した。パネリストは、いずれも現代 GP でキャリア教育に取組んでいる方々である。基調講演者の渡辺氏には、パネルディスカッションではコメンテーターを務めていただいた。コーディネーターは筆者（福岡女子大学文学部教授、文学部長兼キャリア支援センター長）が務めた。

参加者は、学内者が学生６人、文学部教員17人、人間環境学部教員13人、事務職員19人の55人、学外者が大学等教職員27人、高校教職員１人、企業関係者４人、市町村関係職員10人、本学同窓会員13人、一般８人の63人、合計118人だった。

【基調講演の要旨】

基調講演では、およそ次のようなことが述べられた。女子学生のキャリア形成を考えていくときに、２つの未解決の問題がある。１つは、大学では「女子学生のキャリア形成」がさかんに問題にされるが、高校までのキャリア教育ではジェンダーの問題やステレオタイプをなくしていく問題などにほ

とんど触れられていないという問題である。この問題は、文化のなかに深く根ざした無意識的な価値観の問題である。就職間近になって対応できる問題ではない。他の国と同様に、日本でも小・中・高のキャリア教育で取り上げなければならない。もう１つは、男女共同参画の問題は女性だけで解決できる問題ではないのに、男女共同参画の会議になると男性がとても少ないという問題である。いずれにしても、大学教育は社会のなかで行われているので、「大学教育の実質化」を考えるとすると、大学だけではなく、大学を取り巻く状況も考慮に入れなければならない。

他の国では、大学でキャリア教育という言葉はおそらく使わない。キャリア教育というのは教育全体をキャリアの視点から組み直そうとする運動であるから、大学ではそれが定まった上に積まれる専門教育を行う。そのなかで学生にキャリアプランニングをさせるのがキャリア教育になっていて、それは当然のこととされている。しかし、日本ではそうではない現状がある。キャリア教育と就職が一致している。しかも、就職というものを「仕事と個人のマッチング」といまだに捉えている。マッチングをさせるだけではなく、「個人の発達と可能性の開発」を専門教育で行うことが、大学におけるキャリア教育である。

社会で活躍している女性は、社会人としての課題と女性固有の課題のバランスをよく考えている。しかも共通して、誰かをロールモデルにして生きようと思っていない。女性が社会に出だしてからの歴史が短いからロールモデルが少ないという面もあるが、かりにロールモデルがあったとしても、自分はその人とは違うと考える。先輩から学ぶというのは、単に先輩をモデルとするのではなく、先輩がどうやってものを学んだかということを学ぶことである。「生き方のモデル」というのは、人によってみんな違う。

「若い人はコミュニケーション能力が足りない」とか言うが、一般に大学人の方が「協働する人間関係能力」が育っていないし、そのためのコミュニケーション能力も育っていない。大学の教員が自分の専門を通してコミュニケーションをしていくことで、専門教育とキャリア教育の統合・融合ができる。それがうまくいけば、学生は自分の専門に面白みを見つけ、学ぶ意欲が出てくる。大学生は、「コミュニケーションの能力がない」のではなく、「コミュニケーションのチャンスがない」のである。教員の方から、学生とコミュニケーションするチャンスをつくらなければならない。教員の方から、伝え

るべきことをきちんと伝えられる授業をしなければならない。

女子のキャリア形成と言えば、すぐに子育て支援のことや法律的なこと、資格取得のことなどに大学は取組みがちだが、教育機関としてもっと重要なことは、社会人、組織人として組織のなかで自分を育てていく力、自覚的に物事を選択して考える力を、専門教育のなかで育てていくことである。学校を出た後、企業に入れば、能力を育てていくようなチャンスが女性には男性ほど多くは与えられない。だからこそ、大学が女子学生に対する教育において果たすべき役割は大きい。

【テーマ設定の趣旨と福岡女子大学の取組】

基調講演に続いて、総合タイトル「大学教育の実質化と女子キャリア教育」のもとでパネルディスカッションを行った。まず、コーディネーターが「テーマ設定の趣旨と福岡女子大学の取組」を紹介した。その後で、各パネリストが各大学の取組を紹介した。

文部科学省では、これまでの特色 GP と現代 GP を発展的に統合して[18]、平成20年度（2008年度）から「質の高い大学教育推進プログラム」を実施する。このプログラムを通して、文部科学省は、各大学等の人材養成目的の明確化や FD の実施義務化などに大学設置基準等の改正で積極的に対応するとともに、アドミッション、カリキュラム、ディプロマの3つのポリシーの明確化や、学内での PDCA（Plan（計画）、Do（遂行・行動）、Check（評価）、Action（反映・補正行動））サイクル確立による組織的な運用などによって、教育の質の向上への取組強化を促進しようとしている。

このプログラムの主管は高等教育局大学振興課で、そこでは「大学教育の実質化」という点を重視している。大学は学生に在学期間を通じて何を身に付けさせたかということが、「大学教育の実質化」というフレーズで問われることになる。大学が問われる観点としては、アドミッション・ポリシー、シラバス、オフィスアワー、FD、授業評価、教養教育、キャリア教育、ガイダンス、厳格な成績評価などが挙げられている。「大学教育の実質化」が要請される背景としては、社会からの要請、国際的通用性・共通性、情報公開と説明責任、大学の大衆化の４点が挙げられている。

大学はいま「大学教育の実質化」というスローガンのもとで、学生に何らかの能力を確実に身に付けさせる教育をどう構築するかという課題の前に立たされた。もちろん、この課題は、いまはじめて突然出てきたのではなく、

昔からの課題、大学本来の課題、当然の課題である。しかし、大学を取り巻く環境が激変したため、大学は従来の枠組では当然の課題を果たせなくなってきた。そこで、大学教育を抜本的に改革することが要求されている。しかし、これは何も奇抜なことを行うということではなく、大学が学生のために何ができるかという当たり前の課題を大学がさまざまな現状に即したかたちで着実に果たしていくことである。

福岡女子大学のキャリア教育、現代 GP の取組「福女 CE プログラム」(内容については、上述の１～16で紹介したので省略）は、女子学生が卒業後に社会で活躍できるようになるための教育、学生のための教育である。「大学教育の実質化」という課題においても、同じことが要求されていると考える。したがって、「大学教育の実質化」と言おうと、「キャリア教育」と言おうと、大学は学生のために何ができるか、大学は学生のために何をするべきかという「教育の当然の課題」が議論の出発点になると考える。

【広島大学の取組】

広島大学は共学校だが、女子学生の割合は、学部で39%、大学院で32%である。現在取組んでいる現代 GP のテーマは、「学生提案型キャリア形成システム基盤構築」である。広島大学では、「挑戦する意欲を持ち、行動する人材が育つ大学」という教育目標を掲げている。この教育目標の実現をキャリア教育の視点からめざすというのが、現代 GP のテーマである。学内のあちこちには、「挑戦する　行動する　広大生よ！　フロントランナーになろう！」というポスターを貼っている。大学の教育目標を学生にまず知ってもらいたいというところから、今回の現代 GP の取組は始まった。

昨年４月から５月にかけて、学内でプロジェクトの募集を行った。29件の応募があり、選考過程を経て、現在18件のプロジェクトが活動中である。たとえば、瀬戸内海の無人島である津久根島の環境を修復するというプロジェクトがある。この島は、この10年ばかりで木々が枯れて荒廃している。ボート部の学生がこの付近でいつも練習していて、この島には「あまんじゃく伝説」[19] があることを知り、ぜひ環境を修復したいと思った。生物生産学部に所属するプロジェクト代表の女子学生は、島の土壌をチェックして、どんな木を植えれば環境がもとどおりになるかを考え、昨年11月にクロマツを22本植えた。この活動がきっかけになって、「あまんじゃく伝説」を広める活動をしている地域の方々との交流が深まり、今月には「あまんじゃくフォー

ラム」を開催するまでに至っている。最初は、島に渡るためのボートをどう調達するか、保険をどう掛けるかなど、かなりの困難があったが、グループ全員で一つずつ解決しながら実現にこぎつけた。その他にも、東広島で映画祭を開催するプロジェクトや、リハビリテーションを学んでいる医師薬総合研究科の学生がミャンマーのリハビリテーションの状況を視察するプロジェクトなどがある。

こうしたプロジェクトを通して、学生たちは、聞くことが中心の授業ではなかなか身に付かない資質や能力を獲得した。受動的知識収集型学習から、能動的行動型学習への変化が生じた。今回のプロジェクトでは、学内にとどまらず、できるだけ地域や社会に向けて情報を発信してほしいという指導を行っている。その結果、地域や社会とのかかわりがかなり増えた。マスコミにも取り上げられて多くの人に知ってもらい、学生たちの自信につながった。地域の人たちも、「広大生、がんばってね」と声をかけてくれるようになった。この現代 GP の取組を通して、もともと学生たちがもっている興味・関心に対して、それを行動に移すきっかけを作ることができた。キャリア教育においては、どう生きていくかを考える姿勢を学生に身に付けさせると同時に、生きていくために必要な力（コンピテンシー）をどう身に付けさせるかが課題である。この課題は、大学関係者だけでなく社会全体で21世紀型市民をどう育てていくかという課題につながっている。

【京都女子大学の取組】

京都女子大学は、仏教精神を基調とした心の学園として、一貫した女子教育を100年あまりにわたって行ってきた。現在は、４学部９学科がある。現代 GP の名称は「女子学生のキャリア教育の体系化と普及」で、中学生から高校生、大学、そして卒業後を見据えて、それぞれの段階でどんなキャリア教育を行うかということについてのプログラム開発を行っている。本学の一番大きな教育目標が「社会へのリーダーシップを持った自立して生きていく女性」ということなので、中・高・大・卒業まで一貫した女子学生のキャリア形成をすることのできるプログラムの開発をめざしている。

女性のロールモデルについては、モデルというのはどのモデルを選ぶかというような意味ではなく、多様な仕事をしているいろいろな方々がいらっしゃるということを学生に知ってもらうためのものという意味で捉えている。卒業生が大学生に、大学生が中高生に、それぞれに教え合っていく。大学のな

かだけで閉ざされた状況にならないようにするために、外部から人に来てもらったり、海外の大学と交流したり、「大学コンソーシアム京都」という50大学の集まりのなかで連携したり、男女共同参画センターと協力したりして、取組を進めている。建学の精神から、「心の教育」「自立して社会を生きる女性」「社会のリーダーたる女性」を教育目的にしているが、女子学生のためのキャリア教育の目的として、「変化に対応する力」「意思決定する力」「将来設計する力」「社会的リーダーシップを発揮する能力」を新しく設定して、取組を進めている。

このような取組についての広報を行い、学内での気運を高め、教員自身がどう取組んでいこうとするかを考えることが重要である。大学を日本のなかだけで考えていては、わかりにくいし不十分であるので、特にアジアのなかの日本として、他のアジアの国々やヨーロッパと比較するために、韓国の梨花女子大学、香港バプティスト大学、イギリスのシェフィールド大学、内閣府の男女共同参画課から来ていただいて、「女子学生がどのようにキャリア形成をしていけばいいのか」について国際シンポジウムを開催した。学生によるシンポジウムも開催したが、企画や交渉から進行まで全部を学生に行わせた。その結果、学生たちにはとても大きな力が身に付いた。このようにして、京都女子大学らしい何らかの「京女モデル」ができないかということで、取組を鋭意進めている。

【金城学院大学の取組】

金城学院の学院は創立から118年、大学は58年を迎えている。現在、大学院が２つの研究科、大学が５つの学部で、両方合わせて5,300人ほどの女子学生が学んでいる。このような女子大学でキャリアに関係した取組を行うには、金城の特質からすると、少し勇気が必要だった。というのも、金城学院大学は、比較的家庭志向の強い学生が多い大学として世間ではイメージされ、実際、学生にもそのような傾向が見られるからである。徐々にではあるが、６年くらい前から、改組もあって、職業人としての女性の育成をめざす方向に変えようとする動きもあった。本格的には３年くらい前からいろいろな取組を実施し、平成18年度（2006年度）の現代 GP に選定された。取組名称は「個重視・女性のためのキャリア開発サポート」で、キャリア開発教育科目、アドバイザーによる個別指導、キャリアカウンセリングなどを集中的に行っている。

取組には、３つの特徴がある。１つめは、女性のための支援ということで、女性のライフキャリアを理解するための事業を展開している点である。さきほどからロールモデルのことが話題になっているが、本学ではいろいろなところで卒業生との接触をもってもらおうとしている。授業、キャリア相談コーナー、キャリアアップ講座などの講師に、卒業生を多数起用している。２つめは、個重視ということで、全学科の全教員によるアドバイザー、専門家によるキャリアカウンセリング、先輩によるメンタリング・ジョブ・コーチを行っている点である。３つめは、オリジナルのツールをいくつかつくって、手づくりでのキャリア教育、キャリア支援を進めている点である。たとえば、ノートをオリジナルでつくって、これを使ってキャリア開発の授業を行っている。初期は１冊だったが、現在は３冊になっている。３つの科目のテキストも、オリジナルでつくっている。K ウェブという名称で、いつでも学内のどこからでもウェブで職業の検索ができたり、職業診断検査が受けられたりするシステムをつくっている。また、学生、教員、卒業生などが出演して、「マナー DVD」というものを手づくりでつくって、これを全学の学生に配付して、授業や学科のいろいろな演習でも利用している。

本学では、このところ毎年200人強の学生をインターンシップに送り出している。できるだけ十分に準備をしてからインターンシップを行うということを重視して、インターンシップに行くためには半期「キャリア開発」の授業を受けなければならないという設定をしている。今年度は、インターンシップに行く可能性のある学生は1,000人くらいいる。実際には200何十人かになるだろうが、「キャリア開発」の授業を受けた学生は700人だった。授業では、講義だけでなく、いろいろなビジネスマナーやビジネス文書作成など、実務的なことも行い、学生はひじょうに熱心に受講している。学科の教員によるアドバイザーも、全学的に定着してきている。２年ほど前から取り入れたキャリアカウンセリングでは、卒業生でキャリアカウンセラーや臨床心理士の資格をもっている人たち９人に、毎日２人または３人で担当してもらっている。平成18年度（2006年度）のトータルの相談件数は3,000件で、毎日30人くらいの学生が来談するという状況である。本学では、女性が女子大に学ぶということのメリットを学生自身が十分に理解して、どんな人生を歩むにせよ、その問題点や対処法なども考えながら、自分自身の人生をすばらしいものにしてもらいたいという願いを込めて、こうした取組を実施している。

【東京女子大学の取組】

４～５年前のいわゆる「就職氷河期」の時期に、ある大手の銀行が500人の新卒学生を採用したときに、東京女子大学の学生が25人採用された。ところが、そのなかに、卒論提出に数分遅れて卒業できない学生が２人出て、当時の就職センターの課長と２人で人事部長のところへ謝罪に伺った。12月になって卒業できませんでは銀行にたいへんな迷惑がかかるということで怒られたが、「日本にいくつ大学があるかわかりませんが、おたくの大学から20分の１、25人も採用しました。それなりの評価と期待をもって行ったわけです」と評価された。「東京女子大学は指導力のある人たちを育成している」という評価だった。それ以来、「クラスやグループでリーダーになる人が必ず女性である女子大だからこそ、女子学生にリーダーの素養を身に付けさせる教育がより可能ではないか」と考えている。

端的に言って、東京女子大学では、一般に言われる「キャリア教育」は一切行っていない。これまでもやってこなかったし、これからもやらない。東京女子大学で考える「キャリア教育」とは、卒論に収斂される教育そのものである。10人～15人の学生に教員１人がついて、全学生が卒論を書く。そのようにして４年間の集大成として卒論を書かせることが東京女子大学の「キャリア教育」である。本学は、正課の授業のなかに実用的なキャリア教育をいまなお置いていない大学である。創立90年を迎え、初代学長は新渡戸稲造である。キリスト教精神に基づく大学で、哲学科を柱に建学された。北米のキリスト教プロテスタント諸教派が日本に女子の高等教育をさせようとして創立した。哲学科が大学のコアになっていて、それに基づいたリベラルアーツを行っている。今回の現代 GP の取組「東京女子大学キャリア・ツリー」では、大学教育を比喩的に１本の木として考え、３つの柱を立てた。１本目は、リベラルアーツを土壌として専門教育が上に伸びていき、最終的にはキャリア構築の集大成である卒論へ至る柱。２本目は、従来の授業を「キャリア」のコンセプトで明確に位置づけた柱。３本目は、「オープンテーマ演習」で、今回の現代 GP の最も根幹にかかわる柱である。「オープンテーマ演習」では、A、B、Cの３つの項目を立てた。Aでは、メディアによる表現方法などを学ばせ、国内外に発信していく実践的な研究と教育を行う。Bでは、たとえば森英恵、瀬戸内寂聴、有吉佐和子、永井路子などの卒業生について、学生が自主的にグループをつくって研究する。Cは、もともと共通教育にあっ

たオープンテーマ演習を「キャリア」のコンセプトで位置づけたものである。

一番重要なことは、学生がいかに主体的に、ほんとうにやりたいことをやり、学ぶかということである。東京女子大学に入学すると全学生が「東京女子大学学会」に所属し、上級生、下級生、院生が自分たちで企画を出して研究プロジェクトを立ち上げ、指導できる教員を見つけて顧問になってもらう課外の制度がある。この制度と正課の「オープン演習」をどう絡めていくかが今後の課題である。いわゆる「キャリア教育」は行っていないが、「キャリア」というコンセプトを学生と教職員に共有してもらわなければならない。そのために、全学的にこの意識を高めることが必要である。今後の一番の問題は、教員の意識改革である。FD が重要課題である。一人ひとりの教員が「私は授業以外にこんなことができます」ということを掲げて、そこに学生が集まってきて何か活動できればいいなと考えている。要は、教員の大学教育に対する意識をどうするかである。

【コメンテーターのコメント】

注目すべき点は、キャリア教育は全学的な課題であるという点である。一人ひとりの教員の努力もさることながら、全教員の意識改革がキーになる。教員の意識が変われば、多分、「キャリア教育」という言葉は要らなくなる。

そこで、パネリストがお一人ずつ順番に、次の２点についてお話しいただきたい。１点目は、自分がこれだけ一生懸命取組んでいるなかで、一番「鍵になる」課題・問題点、これが解決できるともっとよくなると思われること。２点目は、教員の意識改革という点で、何か試みていることがあるか。

【広島大学からの回答】

２点目の方から。広島大学では、昨日「教育改革 GP シンポジウム」が初めて開催され、学内で実施しているさまざまな取組について報告があった。多くの教員が、それぞれの専攻で教育内容を考え、教育方法を工夫して、学生に力をつけようとしていることをお互いに認識し合った。小さな工夫であっても、情報を交換し共有すれば、「あの人とだったら一緒にやっていけるな。情報をもっと生かすことができるな」と実感できる。このような機会をもつことに意味があると考える。

１点目について。現在、18のプロジェクトが活動中だが、学生の自主性をいかに伸ばすかを考えながらも、支援をどうするか、このバランスが難しいと感じている。学生のなかには、大学という限られた世界のなかでの生活に

より、視野が狭くなり、自分中心の者もいる。別の視点を示しても、「私にはこれしかない」と思い込みが強すぎる場合もある。各グループの活動を理解して指導するために、私はいままでに133回、１回１時間程度、それぞれのグループと話し合った。授業やガイダンスやキャリア相談も担当しているのでとても忙しいが、成長した学生の姿を見たり、学生が「やってよかった」という反応をしてくれるのをうれしく感じたりしながら取組んでいる。

【京都女子大学からの回答】

一番は、「教員の意識」というものと「体制」をどうつくっていくかということである。キャリアというのは職業・就職であると思っている人もいたり、そもそもキャリアとは何かがわからなかったりしていたが、現代 GP 研究会を毎月開いているので、だんだんと意識が広がって、方向性が見えてきた部分がある。参加する教員は毎回参加して理解がだんだん深まっていくが、参加しない教員はまったくゼロの状態で、この差がどんどん広がっていくのが問題である。

一番難しいのは、「すでに自分たちはキャリア教育をやっているんだ」、たとえば教員養成の教育関係の学部だと「もう教員になるための教育をやっているんだ」「それがキャリア教育だ」、何らかの資格を取得させる学部・学科だと「もう自分たちは専門的なキャリア教育をやっているんだ」というような教員の考え方を論破して、「キャリアというのは人生全般にわたるもので、ひじょうに幅広いものだ」ということを理解してもらうことである。しかし、今日のパネルディスカッションでは、専門教育のなかにキャリアの視点を入れ込んでいくという考え方が出されたので、その点で「自分たちはこんなことをやっている」ということをみんなで褒め合って認めることをまず先に行ってから、次の段階へ進んだ方がよいのではないかと思った。

【金城学院大学からの回答】

本学では、キャリア教育の取組を始めたり進めたりすること自体に対して、全学的に反対はそれほどなかった。しかし、やりたい教員や、そういうことに特に関心のある一部の教員、専門性のある教員がやっていればいいんだというような雰囲気は、いまでもたくさんある。

たとえば、共通教育の改革や学部のカリキュラム改革がある場合に、そこにキャリア教育がうまく組み込まれていかないということにならないようにするために、最初は、形式的なところから、まずかたちを整えるところから

入らざるをえなかった。しかし、今後はやはりもうちょっと魂を入れるようなかたちで進めなければならないと思っている。

【東京女子大学からの回答】

本学では、一部の教員がキャリアというコンセプトでいろいろなことを考えて実践しようとしているが、大半の教員が無関心のままにあるというのが現状である。今回の現代 GP に応募するに当たって、この３年間ほどさまざまな準備を行ってきたが、そのなかでキャリアというコンセプトを全体に理解してもらうために、いろいろな定義づけを出した。それに基づいて、いわゆる「一般教育の教員」と「専門教育の教員」に、「あなたの授業は、キャリアというコンセプトにしたら、どういう位置づけになりますか。どういう意味をもちますか。キャリア教育と呼べますか」と問いかけた。すると、「自分が教えてきた教育は一体何だったのか」を考えて、自分なりに「これはやっぱりキャリア教育じゃないか」と考える教員が多く出てきた。

たとえば、外国語教育などでも、「自分はたしかに中国語を教えている」「英語を教えている」「フランス語を教えている」のだが、その向こうに見えるものは、「学生が卒業してから何らかのかたちでそれが生かされてくる学生の人生」ではないか、あるいは「外国を知る」ということではないかということで、自分が行ってきた教育そのものをもう一度見直そうとする姿勢が教員にあったことは事実である。

しかし、１ヵ月ほど前に学会主催で、ICU の大学院教育学研究科の先生をお呼びして「リベラルアーツとキャリア教育」と題したシンポジウムを開催したが、大々的な宣伝にもかかわらずきわめて低調で、教員も学生もあまり集まらなかった。やはり、ほとんどの教員が無関心というのが現状である。

しかし、そのような現状は悲観的な部分だけではない。私はアメリカ文学が専門だが、そのなかでひじょうに評価の高い授業がある。異文化理解の授業で、「翻訳の可能性」と題した授業である。この授業は、多いときには200人近い受講生があるが、教職の単位で必要なので教えやすい。しかし、50人であれ、100人であれ、200人であれ、５人なり６人なりのプロジェクトチームを構成すれば、チーム数が増えるだけで、学生たちは自分たちで切磋琢磨して勉強する。

銀行で評価された「本学の卒業生がもつリーダーシップ」にかかわるが、学生はグループ研究を行うと、教師が言うことよりも仲間が言うことに耳を

傾けて影響を受けやすい。学生のなかにはひじょうに優れた学生が点在していて、その学生たちが影響を及ぼしていく。上級生が下級生に教えるということも頻繁に行われる。TA（Teaching Assistant）で博士課程の院生が教師の補助をして、助言したり指導したりすることもある。こうしたことが全体としてひじょうにうまく作用して、学生が自分たちのやりたいプロジェクトをつくって研究を進めている。

実際には、授業という枠のなかでやらされているのかもしれないが、学生本人たちは「自分たちが考えたプロジェクトをやっているんだ」という主体性を強くもっている。ときには学期末に、何十枚かのレポートが提出される。成果がそのまま残る。おそらく、このことは、さきほど渡辺先生がおっしゃった「協調性」の考え方、「大学では、個が学ぶのではなく、協働で作業し、そのなかで切磋琢磨し、協調して何か仕事をしていくところに教育がある」という考え方と同じだと思っている。この「主体と協働」を「キャリア教育」に結びつけてやったらよいのではないかと思っている。

【会場からの質問】

能動的行動型学習や潜在的能力の覚醒は、地域や社会に基づいている。地域の受け入れ態勢で、どんな混乱や問題があったか。

【広島大学からの回答】

「受け入れ」というのは、たとえばインターンシップの場合は「受け入れ企業を探す」、本学学生が行っているプロジェクトの場合は「一緒にやっていく」ということになる。

たとえば、学生が「ロバの音楽座」というグループを呼んで、一緒にコンサートやワークショップをしたいと考えた場合、地域には親子劇場や子ども劇場のグループがあることを私が紹介する。地域のグループの方と興味・関心が同じだから、参加者もすぐに集まり、情報もすぐに広がっていく。

大学が位置している東広島市西条という地域は、灘、伏見と並んで酒どころである。人口17万人くらいの市に、８つの酒蔵がある。地域の皆さんは、大学が移ってきた段階で、若い人が増え町が活気づけばと思われた。学生も20歳を過ぎれば、おいしいお酒が飲みたいということで地域に出て行く。「酒蔵プロジェクト」では、「ぜひ一緒に」という気持ちで、市民の方々と学生たちがかかわっていくことができる。

運営面から言えば、プログラム実行委員会を組織している。その委員には、

行政関係者、地域商工会関係者（実は、酒造関係の組合の会長)、地元マスコミ関係者などにも加わってもらっている。マスコミには、効果的な取材をお願いしている。さらに、大学のサイトでも積極的に広報している。広報の重要性は、実感している。

【京都女子大学からの回答】

地域の受け入れ態勢や連携ということであるが、私自身がたまたま「まちづくり」や「地域計画」を専門にしている。京都市では、たとえば観光について提案することも多い。交通社会実験への参加もある。観光ガイドや案内表示板が、学生の目から見てどうかという依頼もある。京都女子大学が位置している東山区は、一番の観光地であると同時に、一番の超高齢化した区である。空き家や介護の問題があり、こうした問題に対して、学生と一緒に活動している。こうした活動は、女子学生のキャリア教育として位置づければ、「プロジェクト演習」でできるわけだが、実はこの案はつぶされて腹立たしいかぎりである。

「インターンシップ」というキャリア教育科目のなかで、このプロジェクト型の活動ができないかと思っている。現在は個別に活動しているが、今回、東山区と京都女子大学が地域連携の包括協定を結び、いろいろなことが実際にできる体制が整った。これまで各教員がばらばらに自分の裁量で、自己責任で行っていたことが、大学として正式に実施できるということになった。

【会場からの質問】

各大学でいろいろな取組を行っておられることはよく理解できたが、最終的に評価をする尺度をどのように設けているのか。

【広島大学からの回答】

キャリア教育の評価については最近よく話題として取り上げられているが、本学においては模索中である。教育学に「評価法」という分野があるが、私自身は教育学が専門ではない。学生に対して、授業実施前と実施後にアンケートを行い、各人の目標達成度や何ができるようになったか、何が変わったかを見る。その変化を確認する作業を行っている。

データとしては、まだ蓄積中である。現代 GP については、今年度の活動終了が３月なので、現代 GP にかかわった学生がどう変化したかを３月の時点で検証していかなければならないと思っている。

【京都女子大学からの回答】

私も教育学の専門でないので、教育的評価と言われるとたいへん難しい。キャリア教育と銘打って試行的に実施しているが、これについては、「こういう目的でこれをやります」ということを明らかにしている。その結果については、学生から個別に毎回コメントを取っている。15回の授業終了後にはアンケートを取っている。それによって、それぞれの項目がどうだったか、全体がどうだったかがわかる。数値的な評価ではないが、掲げた目的に対して結果がどうだったかについては、個別に評価している。

教育学的にどう評価するのかはわからないが、私が考えるキャリア教育というのは、人生の全般にわたっているので、たとえば卒業後どうなっているのかという、もう少し長い評価をしていく必要があるのではないかと思っている。そうなると、卒業生の実態をどのようにして把握するかという問題もある。

【金城学院大学からの回答】

本学でも、長期的な効果というものを考えている。10年、20年経って、卒業生が振り返ったときに、教育を受けてよかったかどうかが見えてくるのではないかと考えている。

短期的には、３つの評価を行っている。１つは授業評価で、学期末に実施している。もう１つは学生生活基本調査で、定期的に実施している。このなかに、相談コーナーやサポート体制が適切だったか、役にたったかなど、キャリアに関係した項目を入れている。さらに、卒業生に対して追跡調査を始めた。これを継続的に行っていきたいと考えている。

【東京女子大学からの回答】

授業評価は、同じように実施している。さらに、卒業後４年目と11年目の卒業生に対して、アンケート調査をこのところ長く実施している。４年目というのは、一つの区切りになっている。11年目になると、かなり定着している。その時点で卒業生が大学に対してどう思っているのか、いまどんな考えで人生を送っているかなどについてのデータを取っている。それを私たちの教育の反省材料にしている。

【コメンテーターからのコメント】

評価は必ず話題になる難しいテーマである。質問の考えや状況によって、答え方は変わる。しかし、基本的には、４人のパネリストの回答のとおりで

ある。さらに１つ付け加えるなら、キャリア教育を評価する場合は、その他の教育評価と異なり、「プロセス評価」が必要になる。なぜならば、キャリア教育の場合は、やるべきプログラムや課題が決まっているわけではないからである。キャリア教育で何をやるかは、各大学が決めることである。目的にかなっていれば、何をやってもよい。まず重要なのは、具体的なプログラムが必要になった理由の明確化、現状分析である。次に重要なのは、解決すべき課題、達成すべき目的の明確化である。その次が、具体的なプログラム開発の過程である。プログラムの導入の仕方、導入した結果、期待される内容などを明確化し、実施過程を評価する。そして、改善点を発見して、改善していく必要がある。つまり、PDCA サイクルに従って評価する必要がある。

PDCA サイクルに従って、たとえば筑波大学の場合、「教育改善という目的に則って、なるべく多くの教員が理解し、協力する。そのために初年度は、プログラムの質は少し下がってもよい」という目的を立てた。そういうことから、評価では、「各学部で何人の教員がこれに関心をもって実行してくれたか」を評価項目とした。その結果、教員の意識改革がどうしても必要だということがわかってきたため、教員の反対を押し切って FD を実施した。その後で、「FD に何人来てくれたか」「参加してくれた教員が、その FD をどう評価しているか」などを聞いて、変更点を明確化し、「次は、こういうふうに変えますけど、いかがですか」ということを教員に打診した。この打診に対して、「教員からどんな返事が来るか」というのもプロセス評価である。

もちろん、学生にも、資料等について評価してもらった。その場合、学生の満足度を数量で評価することには危険性を感じている。なぜならば、学生はほんとうに一生懸命になって取組み出すと謙虚になってしまい、厳しい評価をつける場合もあるからである。それゆえに、アウトカム評価では、記述式を並行して使用する。プログラムの内容についての評価のために、各授業が終わった後で感想文、リフレクションペーパーを必ず取る。その場合、プログラムの目標によって、評価のポイントは変わる。たとえば、「自覚的に自分の将来に関心をもつ」ことを目標にする場合は、言葉の中身がどれくらい個別化してきたか、抽象的な言葉から具体的な言葉へどれくらい変化してきたかなどに焦点を当てて評価をするようにしている。

23　学問キャリア導入教育特別講演会（平成20年度）

平成20年度の「学問キャリア導入教育特別講演会」は、平成20年（2008年）８月６日に本学で開催した。講師は、法政大学キャリアデザイン学部教授、学部長の高野良一氏に依頼した。平成15年（2003年）に設置されたキャリアデザイン学部というユニークな名称の学部での先進的なキャリア教育の内容と成果を紹介してもらうために、講演テーマは「法政大学キャリアデザイン学部の試み」とした。

参加者は、一般４人、学生12人、文学部教員12人、人間環境学部教員20人、事務職員14人の62人だった。

高野氏に今回の講演依頼に応じていただいた最大の理由は、福岡女子大学で「学問キャリア導入教育」と「職業キャリア導入教育」を「車の両輪」とするキャリア教育を行っている点に高野氏が痛く共感なさったからである。法政大学でも「二つの肺」(「基礎ゼミ」と「キャリア相談実習」) と呼んでいる導入教育を行っている。キャリア教育ではこの双方向からのアプローチが不可欠だという点で、共通の認識が確認された。

法政大学キャリアデザイン学部は、2003年に創設された。「新しい教育学部」で「大人の教育学」を展開するということで始まった。母体は、旧文学部教育学科、経営学、文化・コミュニティ論の３つである。「新しい大学教育の実験場」として位置づけ、教育内容のみならず教育方法の刷新を図った。当時は、「キャリアデザイン」というコンセプトは、ほとんど認知されていなかった。高校訪問の際、「美術系の学部ですか」とも言われた。今年の父母懇談会でも、「どんなことをやっているのですか」との質問があった。

「キャリア」とは多義的なコンセプトだが、それは最も広く言えば「人生」である。少し狭く言えば「仕事」であり、最も狭く言えば「職業」である。そのような多義的な内容を学生のニーズに合わせてどう組み合わせて教育するかが課題である。キャリアデザイン学部の多くの学生は、「いろいろなことを自分で選んで学べる点がよい」と言っている。しかし、卒業時に「何をやったか曖昧でわからない」という学生もときどきいる。多義的なコンセプトというのは、入れ物が大きくて便利で学生のニーズに合わせやすいが、結果が曖昧になる危険性があるという二面性をもつ。

１学年は300人程度で、男女比は４：６である。社会人学生が１割弱、外

国籍学生が0.5割前後である。多様な入試経路を用意している。卒業生の進路は、文系他学部とあまり大差はないが、就職率は若干よく、業種としては人材・IT 系も多い。企業からは、「卒業生はソーシャル・スキル（コミュニケーション能力）が高い」と評価されている。しかし、まだ２回しか卒業生を出していないので、評価はこれからだと考えている。特に、離職率なども含め、１期生が卒業してから３年経った段階での評価が重要だと考えている。

約1,200人の学生に対して、教員は約30人である。およそ、教員１人に学生40人の割合である。教員は、キャリアを主題や領域とする複数ディスプリンの教員集団で、教育学、人事・労務系の経営学、文化・コミュニティ論の教員が多い。心理学と社会学の教員を拡充している最中である。また、「準専門職」のアドバイザーを７人雇っている。他学部には、このようなアドバイザーはいない。その趣旨は、「教職員と学生のリエゾン」(媒介者、「ナナメ関係」）を図る点にある。アドバイザーは、現在、事務職員扱いで非常勤なので、今後、教育職化、常勤職化したいと考えている。その他に、事務職員が８人いる。

なぜキャリア教育が必要になったのかについては、マーチン・トロウの高等教育段階図式で、エリート型（大学進学率が15%以下)、マス型（50%以下)、からユニバーサル型（50%以上）になった点が大きい。ユニバーサル化のなかでは、３つの選択肢が考えられる。①一体化と非構造化を促進する道（ショッピングモール・モデル)、②部分的一体化を許し構造化を維持する道（フンボルト型学問共同体モデル)、③一体化しながら再構造化する道(キャリア教育推進モデル）の３つである。

学生にどんな力をつけさせるのかについては、「社会人基礎力」(経済産業省・研究会）がある。「社会人基礎力」とは、基礎学力と専門知識を媒介し、相互補完するコンピテンシーであり、①前に踏み出す力、②考え抜く力、③チームで働く力から成る。OECD にも類似のキーコンピテンシーがある。

このような「人間力」や「社会人基礎力」については、批判もある。能力を個人主義化している、自己責任化している。態度主義、心理主義である。適応主義で、労働市場への順応を求めている。社会経済的問題を軽視して、「教育で始末をつける」発想をしている。客観性のある専門知識・スキルあるいは基礎学力こそ重視すべきである。しかし、そのような批判を受け止めつつ、「社会人基礎力をどう再構造化するか」がポイントである。

いわゆる「キャリア教育」にも問題がある。主なものとして、６つある。①就職技法偏重（エントリーシートや面接訓練の偏重)、②安易な適職選択(インターネットに依存して短時間で行う業界・企業研究、業者まかせの適職テストの実施)、③視野を狭める自己分析（安易な自己診断テストで自己像を固定化)、④物見遊山気分の職業知識教育（体験しただけのインターンシップ)、⑤本人を責める職業倫理教育（職業人講話での説教や自慢話)、⑥キャリア教育ではできない積極態度教育（キャリア教育の過大視と矮小化。ゼミや普段のアカデミックな教育でキャリア教育をどう行うかが重要。歴史教育や日本文学の教育でキャリア教育の視点を入れて教育をどう行うか。キャリア教育は、「特定の科目」や「特定の教員」で行えばよいというものではない)。このような問題を批判しながら、学部教育全体のなかでどうキャリア教育を行うかが課題である。

広義のキャリア教育は、学部教育・大学教育の全体である。狭義のキャリア教育は、面接の訓練、適職テスト、インターンシップなどである。重要なポイントは、広義のキャリア教育と狭義のキャリア教育をつなげて再構造化することである。そのときに一番重要になるのが、「レリバンス」という概念である[(20)]。

「レリバンス」とは、意義、質的な関連性のことである。大学教育に取り戻されなければならないレリバンスは、３つある。①即時的レリバンス（おもしろさの実感)、②職業的レリバンス（労働力の質)、③市民的レリバンス(市民として生きる道具)。特に重要なのは②と③である。キャリア教育の課題は、大学教育の中身と将来働くとき・市民として生活するときの質的な関連性をどうつけていくかという点にある。

キャリアデザイン学部には、３つの柱がある。①アカデミック系科目、②ソーシャル・スキル系（体験学習）科目、③ゼミ系科目の３つである。正課科目のスコープ（広がり）とシークエンス（順次性）を保ち、アカデミック系科目とソーシャル・スキル系科目の仲立ちをするのがゼミ系科目である。

正課だけでなく課外活動も視野に納めた教育・学習メソッドとして、「参加型学習」を重視している。しかし、ワークショップ、ファシリテーション、アサーション、メンタルヘルスなどのスキルを大学教員は通常もっていないので、FD でスキル形成を図り、授業に持ち込んでいる。正課科目では、導入教育、一般教育、専門基礎教育、専門教育に参加型学習を埋め込んでいる。

キャリア支援や就職支援には、学生・先輩・社会人の参加を組み込んでいる。高大連携、産学連携、受験生・新入生支援（オープンキャンパス・履修相談会）などで、学生に他者支援活動を行わせている。学部内自主活動を支援し、学生に自主的学習を促している。施設、機器、奨学金などの条件整備はもちろん、教員やアドバイザーが助言や支援を行い、表彰などで学生の活動を評価している。

現代 GP のプログラムでは、「基礎ゼミ」と「キャリア相談実習」という「二つの肺」を掲げている。基礎ゼミを設置した理由は、学部学生がアカデミック・スキルに弱いということを自覚したからである。もう一つの理由は、教員間で学部教育の共通理解を図るという点である。取り上げるアカデミック・スキルとしては、大学における学びの理解、ノートテイク、図書館・データベースの活用、クリティカル・リーディング、フィールドワーク、KJ 法などの情報整理、プレゼンテーションである[21]。基礎ゼミでは、アカデミック・スキルの形成をめざした導入教育を行うが、そこでは同時に、少人数教育を通じてソーシャル・スキルの形成も副次的に行うことができる。

ソーシャル・スキルの形成は、主として「キャリア相談実習」で行う。これは、事前指導と相談実習のセットになっている。事前指導では、聴き方、自分の意見の言い方（ロールプレイ）、グループでの話し合い、模擬練習を行い、一種のポートフォリオである「キャリアデザイン・ノート」を使用する。ノートをつけるというのは、アカデミック・スキルである。ソーシャル・スキルとアカデミック・スキルを連動して形成させることをねらっている。相談実習では、学部が認定した学外・学内での相談活動を行う。他者支援、自己理解、反省の３つの異なる活動を行う。体験しただけでは効果がないので、事前指導と事後報告を組み込んだ「効果測定テスト」を開発して実施している。

就職活動は、ほぼ全学生が取り組む「特殊なインターンシップ」と位置づけている。文部科学省の『小・中・高校キャリア教育推進の手引き』（2006 年）にも、「過去・現在・将来の自分を考えて、社会の中で果たす役割や生き方を展望し、実現すること」と記されているが、就職活動は、まさにこの活動である。バーチャルな情報・体験ではなく、リアルな情報・体験こそが重要で、就職活動は社会人基礎力形成の場である。

就職活動を学部教育全体のなかに位置づけ、独自の教育・支援プログラム

を設定している。ただ、構造的な問題として、就職活動の早期化という問題がある。３年生の後期から就職活動が始まる。すると、大学教育は２年半ということになる。１年生の導入教育も重要だが、２年生の教育が重要となる。また、４年生の４月あるいは連休前、遅くとも夏休み前には、ほとんど（８割程度）の学生の就職活動は終了しているので、4年生の教育も重要となる。

以上のような講演に対して、２つの質問が出された。１つめは、法政大学内において、キャリアデザイン学部と他学部の連携はどうなっているかという質問だった。これに対して、次のような回答があった。キャリアデザイン学部は実験学部で、他学部に対しては、キャリア教育の視点を持ち込む役割を有している。就職部を改組したキャリアセンターの研究部門には、キャリアデザイン学部の教員が派遣されている。全学のキャリア形成教育のプログラムもキャリアデザイン学部の教員が協力して作成している。そもそも他学部のキャリア形成科目の必要性を訴えて実施に移したのも、キャリアデザイン学部の教員である。キャリアデザイン学部の教員がキャリアセンターのセンター長を務めるだけでなく、キャリアデザイン学の大学院の修了者がキャリアセンターのアドバイザーを務めるなどして、全学的連携を強めている。実験学部というのは、学部だけでの実験というのではなく、キャリア教育の視点を全学に持ち込む実験を行っているという側面もある。

２つめの質問は、「キャリアデザイン学部」というものを高校生がどう受け取っているか、志願者数の推移はどうなっているのか、併願状況はどうなっているかという質問だった。これに対して、次のような回答があった。併願状況については、ご勘弁いただきたい。高校生に対しては、「こういうことが学べるよ」ということを言うことが重要で、キャリアデザイン学部とはこういう学部だと説明する「言葉が先にない」ことが重要である。履修相談会やオープンキャンパスでなぜ学生を使っているかと言えば、学生自身の振り返りや他者支援の経験が重要だからというだけでなく、学部で何を学んでいるかを「学生の目線で語る」ことが重要だからである。美しいパンフレットで宣伝をする時代は終わった。パンフレットは情報としては重要だが、受け手の側に情報をどんなふうにリアルに伝えるかが重要である。学生が頓珍漢なことを言うリスクも負っている。しかし、それは受験生が学部に入ってから４年間で教育しようと思っている。

講演会終了後、講師の希望により、福岡女子大学の学生を中心にした「情

報交換会」が別室で開催された。

24　作文コンテスト（平成19年度）

現代 GP への申請書には、「ゼミ対抗の作文コンテストも、学生主体の運営体制で実施」すると記載していたが、そのもとになる「学問基礎ゼミ」が未開設であるため、平成19年度の「作文コンテスト」は、大学祭の行事として実施した。もちろん、学生の組織である大学祭実行委員会の企画として、学生主体の運営体制で実施した。

大学祭実行委員会が案を練って実施要領を作成した。字数は600字～800字、テーマは大学祭のテーマと同じ「Lady ゴーゴー!!!」というテーマにし、「女子大の魅力とそのアピール方法」や「女性のパワーをどう表現するか」について、近年の女性の社会的進出などの点を踏まえて、女子大生の将来のキャリアを考える作文を募集したところ、23人の学生から応募があった。大学祭実行委員会のメンバーで第１次審査をして、そこで選ばれた10人が大学祭当日の本選に出場し、作文を発表した。本選は、平成19年（2007年）11月10日10時から福岡女子大学の大学会館で行われた。本選では、大学祭実行委員長と学生自治会長の学生２人に、学長、文学部長、人間環境学部長の３人を加えた５人が審査員を務めた。

参考として、１位に入賞した作文を紹介する。氏名等は割愛した。

悩むより、挑戦あるのみ

私は、様々な分野で活躍する女性を取材する機会に恵まれた。そして、ある女性との出会いが私を変えた。その女性は、臨床心理士として大学や中学校でカウンセリングを行う傍ら、保健所や地元センターなどで子育て支援にも携わっていた。年齢は40代半ば。私はてっきり、ベテランのカウンセラーだと思っていた。しかし驚いたことに、臨床心理士の資格を取得したのは、１年ほど前だという。夫のリストラを機に、英語もわからないまま37歳のとき渡米し、語学学校に通い、大学の心理学科に入学したそうだ。

彼女は「渡米することに不安はあまりなかったですね。本当に自分がやりたいことは、人生のどこかで必ずやっておかなければ、いつまでも納得できないままに心に残るでしょう。だからこそ、チャンスが訪れたときは迷わず

挑戦してみるべきだと思います。」と話してくれた。自分の年齢や語学力などは関係なく、果敢に新しいことに挑戦する彼女の行動力と前向きさに驚かされた。そして、逆境をチャンスに変える力強い女性のパワーを感じた。さらに、「その時、自分がやりたいと思ったことやしなければならないことを、一生懸命やったり、楽しんだりしていると、道は繋がるものよ。」とも話してくれた。私は当時悩んでいた。自分が想い描く未来の自分と今やっていることが繋がらないようで不安だったからだ。しかし彼女と話すうち、今自分が立っている場所が理想とは違っていたとしても、そこで精一杯頑張れば、必ず自分が進みたかった道へと繋がってくるに違いないと前向きに捉えられるように変わっていった。

彼女は、まだたくさんの夢があるという。その実現に向けて、今も挑戦を続けている。その姿を見て、私も負けてはいられないと感化された。「悩むより、挑戦あるのみ」をモットーに、私も彼女のように社会で活躍し、いつまでも夢を追い続けるパワフルな女性になってみせると意気込んでいる。

25　人生・職業・社会Ⅰ（平成19年度後期）

職業キャリア導入教育において、正課の科目を４つ新設した。「人生・職業・社会Ⅰ」「人生・職業・社会Ⅱ」「キャリア・デザインⅠ」「キャリア・デザインⅡ」である。「人生・職業・社会」では主に１年次学生の受講を、「キャリア・デザイン」では主に２年次学生の受講を想定している。「Ⅰ」の科目は前期開講、「Ⅱ」の科目は後期開講である。現代 GP の実質的開始時期等の関係上、平成19年度（2007年度）は、前期ではなく後期に「人生・職業・社会Ⅰ」を試行的に開講した。７人の教員で担当し、15回実施した。そのうち、１回（第７回）は遠山顕氏のキャリアの視点からの英語学習講演会、１回（第15回）は期末試験に当てた。受講者数は、72人だった。

「人生・職業・社会Ⅰ」の授業では、学生の一人ひとりが自己概念を確立し、有意義なキャリア形成ができるようにするために、人生・職業・社会の現実を学生が十分に認識するようになることをねらっている。キャリア・ジェンダー視点からは、次のようなねらいを設定している。自己概念の確立やキャリア形成などは、他人から与えられるものではなく、自分自身で行わなければならないものであり、さらに人間には誰しも、自分で変えられる条件と、

自分では変えられない条件が課されているので、まずは人生・職業・社会の現実を学生が十分に認識することにより、一生の問題としての自己概念とキャリア形成の根本問題に学生が向き合うように教員がさまざまな側面から問題提起していくことが、この科目のねらいである。

学生の到達目標としては、次の３点を掲げている。①人生・職業・社会の現実を十分に認識し、自分が置かれている状況を理解することができる、②毎回の授業で認識したことをもとに、論評文を書くことができる、③授業で認識したことをもとに、自分が理想とする人生・職業・社会について自分の意見を発表することができる。

ちなみに、「人生・職業・社会Ⅰ」の授業では、学生がまず人生・職業・社会の現実を十分に認識するようになる点を最も重視しているのに対して、「人生・職業・社会Ⅱ」の授業では、学生が人生・職業・社会と自分自身のかかわりについて考えを深めるようになる点を最も重視している。「人生・職業・社会Ⅱ」の授業は、平成20年度（2008年度）後期に初めて実施する予定である。

90分の授業の進め方は、次の４段階になっている。①担当教員が30分程度の講義を行う、②講義について、受講者が原稿用紙[22]に400字の論評文を30分程度で書く、③受講者が３人グループになって論評文を一人ずつ発表し、コメントを出し合う「三角（参画）討論」を15分程度で行う、④希望者が受講者全員の前で論評文を発表し、受講者全員で討論する「全体討論」を15分程度で行う。

第１回～第13回までの授業では、授業中に400字の論評文を作成する。しかし、第14回目の授業では、受講者はそれまでの13回の授業で認識したことをもとに、「自分が理想とする人生・職業・社会」について2,000字の論評文をあらかじめ書いてきてから出席することにした。この授業では、いきなり「三角（参画）討論」を行い、その後じっくりと「全体討論」を行った。

参考として、授業で提出された作文を各回につき１例ずつ紹介する[23]。作文のタイトルは、受講者本人が付けたものである。

【第１回】キャリア成功への道

私は今回の授業に衝撃を受けた。最近、私は「私の生き方」がわからず、途方に暮れていた。私は何がしたいのか、何に向いているのかということを

考えていた。そして私は「他者の欲求を生きる」ことになりかけていた。自分が欲するものを第一に考えていたつもりだったが、実際は「他人が欲するもの」を考えていた。それは、「自分」が無いからだ。自分自身の生き方がわからなくなりかけていたのは、自分が無いため「生きる意味」を見出すことができなくなっていたからだ。「生きる意味」を見出すことができたら、私のキャリアは成功への道をたどる。

どうやって「生きる意味」を見出すかを考えた。まずは、現在の日本や世界を知ることだ。そのためには、大学生活で学ぶことを一つでも多く吸収し、考えてみることが重要だ。今の私は、日本や世界のことをあまり知らない。そのため、「生きる意味」がわからなかった。これからは、日本や世界について知って、自分で考え、「生きる意味」を見出していきたい。

【第２回】「生きる意味」を考える過程が大切だ

「生きる意味」について、様々な人の考えを知ることができた。前回の授業で、「生きる意味」を見つけることが大切だと私は考えた。一方で、「『生きる意味』を考えない方がよいかもしれない」「生きることに意味はない」と考えている人たちがいた。このことに私は驚いた。確かに、それも一つの意見である。人によって考え方も違うし、物事に対する感じ方も違う。私と反対の意見を聞いても、今までの考えを変えずに、私は「生きる意味」を探したい。

私は「生きる意味」について考えるのは意味があると思う。他人との協調性を中心に考える世界に身を置いていたからこそ、新しい視点で自分を見つめ直すことは大切である。「生きる意味」を考えていくことで、今までにない物事に対する見方を得ることができれば良い。最初から、「生きる意味」はないと決めつける必要はない。答えを見つけ出すことだけが大切なのではなく、その過程も大切である。

【第３回】オリジン（源）を見つける

「オリジナリティ」や「オーダーメイド」という言葉に対して、「人と異なった考えをもつ」や「同調しない」ということを私は考えていた。しかし、今回の講義で、そうではないことに気づいた。自分で悩み、考えた結果が他人と同じであったとしても、そこには立派な「オリジナリティ」があり、それは「オーダーメイド」である。「オーダーメイド」という言葉には、深い意味がある。他人との共同作業という意味だ。「オーダーメイドの服」といっ

ても、自分一人だけで作ることはできないのだから、考えてみれば当然だ。

それは、あくまで共同作業だ。しかし、共同作業という言葉を楯に、他人に流されてはならない。私は自分の中のオリジンを見つけたい。今回の講義で、気が楽になった。というのも、今までは、「人と違うことをしなければならない」と考えていたからだ。結果的に人と同じになったとしても、自分自身で自分のオリジンを見つけられたら満足である。

【第４回】情報と知識を得る

選択肢を多く得るためには、たくさんの情報や知識が必要だ。情報がなければ、私達はどの方向に進めば良いか分からない。情報を理解するためには、それを理解できるだけの知識が必要である。理解できなければ、情報を得ることはできない。

私達はいつか人生の選択を迫られる。そして、どの道に進むかを選ぶのは、他の誰でもなく自分自身だ。その時に自分にとってベストの道を選ぶためには、多くの知識と情報をもっておく必要がある。

今、私達は情報、知識を得ることのできる良い環境にいる。私達は大学で多くの授業を受けることができる。授業の中で、知らなかったことを知り、新しい興味をもつこともできる。大学の授業だけで人生の選択ができるほどの十分な情報や知識を得られるとは思わないが、私達は今、多くのことを見て、聞いて、感じて、考えることで、選択の時に必要な情報と知識を手に入れなければならない。

【第５回】教養と品格を身につける

自分の「生きる意味」を考えるにあたって、自己否定は無意味であることがわかった。人間の行動は、自己を肯定してほしい、肯定したいという思いゆえの行動だからである。ならば、否定に走るより、肯定できるようになるための努力をした方がよい。

今回の授業を受けて、「生きる意味」を前向きに考えていく糸口が見つかった。「いい人生を送る」ための必要十分条件は「自分を磨く」ということだ。今、現に生きている自分が、これから人生をどう送っていくかが大切なのだ。

自分を磨くとは、どういうことか。私は、自分の内面を豊かにすることだと考える。具体的に言うと、教養を積み、品格を身につけることだ。自ら積極的に見聞を広め、いろいろな社会の場で対応できるように努めなければならない。また、様々なことに対し、許すということを覚えなければならない。

これらは決してすぐに身につくものではない。私は大学で少しでも変わることができれば嬉しい。

【第６回】家庭と仕事

ハッピーキャリアの５つのタネの中に、「働き方」のタネというものがある。女性は、男性と違い、結婚すると出産や育児を経験するかもしれない。そうなると、会社の育児休暇などの制度が充実していない場合は、仕事を辞めることも有り得る。

そういったこともあって、私は結婚に関してあまり積極的になれない。しかし、今の社会は子育てについての制度が充実し始めたので、女性にとって仕事と家庭の両立が不可能ではなくなった。それでもなお、私は女性としての働き方に迷いがある。仕事が続けられるとはいっても、支障をきたして、どちらかが中途半端になるのではないかと不安である。どちらか一方しか選べないと考えているわけではないが、家庭と仕事の両立は、私には難しそうに思える。

実際、会社に入って、そういう状況になってみないと、答えが出ないのかもしれない。しかし、今から少しずつ、女性としての仕事と家庭の関係について考えていきたい。

【第７回】キャリア形成において、積極的な姿勢が大切だ

私は、今回の遠山顕さんの講演会を聞いて、大学時代の大切さを再認識した。遠山さんは60歳になった現在、自分を振り返ると、大学時代が一番思い出がつまっていて、自分のキャリア形成において重要な役割を果たしているとおっしゃっていた。遠山さんが大学時代に打ち込んでいた芝居が現在の土台を作り、在学中に習った英語での早口言葉が英語教師となるきっかけを作った。

遠山さんの話を聞いていると、どれも偶然が重なっていて、それがたまたまキャリアにつながっていると思った。でも、そこで見逃してはならないのが、遠山さんの積極的な姿勢である。私は、遠山さんの好奇心とそれに対する積極的な姿勢がキャリアを作る一番のきっかけになっていたのではないかと思った。私もこれからあと３年ちょっとの大学生活において、いろいろな経験をして視野をひろげていきたい。そうすればきっと、それが自分のキャリア形成につながるはずだ。

【第８回】大学生活は将来のためのステップだ

今回の講義で改めて気づかされたことが２つある。１つめは、多くの人がそれぞれの生活のために働いているということである。２つめは、やりがいのある仕事を見つけるか見つけないかで、将来が多少左右されるということである。自分の興味や性格にあわない職に就き、無理をして体を壊してしまうと、仕事を辞めなければならなくなる。医療費も払わなければならないので、生活は大変である。私はこの２つの話を聞いて、やりがいのある仕事が将来に関係しているということに納得した。

私は、自分が就きたい仕事をまだ決めていない。ただ漠然と、英語に興味があるから、英語を使った仕事に就きたいとしか考えていなかった。しかし、今回の講義で、その興味こそが重要だと気づかされ、もっと自分の興味の幅を広げ、もっと自分に向き合おうと考えた。だから、この大学生活で自分と深く向き合い、多くのことを吸収していきたい。

【第９回】前向き実践型へ移る

今日、「若者の職探しの分類」で、４つの分類ができることを知った。私は「意欲空回り型」に入る。私には、ぼんやりとだが、してみたいことがいくつかある。しかし、どの職が向いているのかも、どの職が本当にやりたいのかも、わからない。

授業で、福女卒業生の進路のデータを見た。先輩方の実際の就職状況を目にして現実味があった。３年後の自分がどうしているのか、少し不安になった。民間企業と言っても、非常に多くの民間企業がある。どの企業に就職するかによって、仕事内容や周囲の人々が異なる。

そう考えると、何になりたいのかを決め、希望の就職先をいくつかに絞る必要がある。私は、就職サポートのいくつかのサイトに興味をもった。それらのサイトを見て、またさらに大学内のキャリア支援センターで先輩方の実際の報告書を見たい。一日でも早く、「意欲空回り型」から「前向き実践型」へ移る必要がある。

【第10回】取捨選択された情報の背後を理解すると同時に、取捨選択された情報を見極めていきたい

新聞やテレビなどの情報は、取捨選択されている。確かに、その通りである。限られた範囲の中で情報を伝えるには、情報の取捨選択が必要である。それゆえに、その情報を見極めるということを、私たち自身が自分で行わな

ければならない。

私たちは、主に新聞やテレビ、インターネットなどから情報を得ざるをえない。これらの情報発信元から情報を得ないと、日常生活で、世界で何が起こっているのか、私たちは知ることができない。何らかのかたちで取捨選択された情報だと理解していても、私たちがそのようにしてある程度の情報を得ることは、私たちにとって必要である。

したがって、情報を受け取る際、私たちには様々なことが要求される。取捨選択された情報だけでなく、その背後の情報も自分で理解しようとすることや、取捨選択された情報の見極めをすることである。今の私には難しくて、できる範囲が限られている。しかし、これから、その力を少しずつ伸ばしていきたい。

【第11回】立場を変えて現状を見つめ、世の中を知り、自分の意見を確立させていきたい

今日の授業では、前回のテーマである「疑い深く生きる」ためには、具体的にはどうしたらよいかが分かった。それは、立場を変えて現状を見つめることである。

配付された資料には、海外諸国と日本の大学では学費がどれほど違うかが載っていた。学費が最も高い日本の私立大学とドイツの大学を比較すると、日本人１人を通わせる分のお金で、約64人のドイツ人を通わせることができる。いかに日本の大学の学費が高いかが分かった。今までは、私は学費について、日本の私立、公立、国立の大学の比較をしたことはあった。しかし、もっと違う立場（海外）に立つことで、日本の現状が見えてくることに気づいた。

自分の人生を大切に生きるために、疑い深く物事を見る。そのツールとして、立場を変えて現状を見つめる。今からこの姿勢を大切にして、もっと世の中を知り、それを自分の中に取り込んで、自分の意見を確立させていきたい。

【第12回】現代の社会における非正規雇用の影響

私が非正規という形の雇用を認識したのは最近だ。パート・アルバイトという言葉については、ある程度身近に感じていた。しかし、派遣・契約社員という言葉については、名前ぐらいは知っていたものの、具体的な知識はなかった。最近になって、そのような言葉を目や耳にすることが多くなり、そ

のような雇用について知る機会があった。非正規雇用は、格差が叫ばれる現代の日本社会において、重要なポイントになっていたのだった。

非正規雇用が増加する社会と対照的なのが、日本的経営を基盤とした戦後の社会である。両者の相違点は数多くあるが、その中の１つに、自分が勤める会社に対する忠誠心や愛着心が育ちやすいか否かという問題がある。日本的経営が崩れつつある現在の社会では、こうした精神をもつ人々が減ってきている。確かに、こういった精神が人々から公平な判断を奪う要因の１つになっている。しかし、これは働く意欲にも繋がるはずだ。現代の実情は望ましくない。

【第13回】制度改革とともに社会の意識改革をもっと進めるべきだ

女性が社会に進出しだしている今、育児・家事における女性の負担が昔と変わっていないというのは問題である。実際、育児休業をとる夫は少ない。特に共働きの場合は、育児・家事の負担は女性の方が大きくなりがちである。妻が望んで負担している場合は、他人が口を出す問題ではない。しかし、妻が夫の協力を望んでも、夫が妻に任せきりにしたり、夫自身は協力したいと思っているが家事や育児が理由では仕事を休みにくいという状況があったりすれば、これは社会的問題である。なぜならば、そのような社会には、性別を理由に役割を付与する構造があるからだ。

今、育児・家事に積極的に参加しようとする男性は、昔よりほんの少しだが増えているそうだ。育児休暇の制度があっても、休暇をとりにくい環境があるなら、それは無意味である。女性にばかり家庭的要素を求める社会は、遅れた社会である。日本はアジアの先進国代表として、制度改革とともに社会の意識改革をもっと進めるべきだ。

【第14回】自分が理想とする人生・職業・社会

私は、自分の将来を思い描くのが好きだ。自分の理想像を想像すると、未来に希望がもてる。それに向かって何か行動を起こしたくなる。高校生までの私は、本当に自分が好きなように考えていた。「高校、大学を卒業してすぐに結婚すればいいから、仕事なんかしなくても問題ない」。ずっと、そう考えていた。「仕事をしなくったって、自分の家庭をもって、普通に生きていければそれでいい」。ずっと、そう思っていた。

しかし、大学生になって、この福岡女子大学に入学して、いろいろなことを学んできた今、あの頃の私は何も知らなかったのだということを思い知ら

された。「人生・職業・社会Ⅰ」や教職の授業を受けていく中で、思い描く理想の形が変わってきた。昔と考え方が最も変わった点は、受け身の人生よりも、自ら積極的に行動する人生を望むようになった点だ。以前は、仕事をしないなんていうとんでもないことを考えていた。しかし、今は、自立した女性にとても憧れている。仕事をしない人生なんて考えられない。むしろ、今の時点で早く働きたいと思っているくらいだ。

そう思えるようになったのは、先ほども述べたように、この授業や教職の授業でよい刺激を受けることができたからだ。そして、人生で初めて受けたキャリアカウンセリングがとてもためになった。１年生で将来の仕事について深く考えるなんて、早すぎるかもしれないと思った。しかし、まったくそんなことはない。むしろ、今のうちから自己分析をすることは、とても大事なことなのだと深く感じた。自分は就職して、一体何がしたいのか。どんな職種なら、打ち込むことができるのか。カウンセリングを受けることによって、私は自分一人では見つけられなかったであろう「企画」という答えを見つけることができた。物でもイベントでも、多くの人々の心に伝わるもの、今まであったようでなかった新しいものを、私は発案したいと思っていたということが、わかってきた。

しかし、具体的にどの分野で働きたいのかは、まだ決まっていない。しかし、「企画」という目標が見つかってからは、以前よりも新聞記事やニュース番組の様々なところに興味をもてるようになった。それぞれのちょっとしたところでも、表面的な部分だけでなく、その裏やそれが成立するまでの過程など、深いところを追究したいという気持ちになった。将来、自分が自分に最適の職場で働く様子を考えると、本当にわくわくしてくる。男性に負けない仕事力、行動力、統率力を身につけ、その仕事が自分の人生の生きがいだと思えるように頑張りたい。

仕事をこなしていくと同時に、自分の家庭もしっかり支えていきたい。以前は、結婚後は専業主婦になるか、一旦仕事をやめて子育てが落ち着いてからまた仕事をしたいと考えていた。その理由は、現代社会では、青少年の非行や精神的な問題が何かと多く存在し、それが家庭環境によって左右されるという話をよく耳にしていたからだ。子どもを保育園に預けて仕事に行くのは、子どもに寂しい思いをさせてしまい、かわいそうだと思っていた。仕事をしたいという気力がさほどなかった以前なら、会社をやめる道でも構わな

いと思っていた。しかし、今はそう思わない。自分が一生懸命自己分析をして、せっかく勝ち取った道を捨ててしまうのは、とてももったいない。

よく、子育てをしながら資格を取得して、その後に新しい仕事に就くという将来計画を聞くが、私は、新しい職業に就くというのはそう簡単にできることではないと思う。もちろん、パートやアルバイトなら話は別だ。私は仕事をするなら、正社員としてしっかり働きたい。パートやアルバイトを悪く思っているわけではないが、正社員の方がやりがいのある様々な仕事ができるし、サポート体制も充実していると考えるからだ。そう考えているので、私の場合、一旦仕事をやめて、その後で再就職することを考えるのは難しい。よっぽどの能力があるなら話は別だと思うが。私は、子育てをしながら仕事は続けたい。そうなると、就職先は、女性へのサポート体制が特に充実している企業を選ばなければならない。

今の日本社会は、かなりの悪循環になっている。少子化と言いながら、女性への抜本的な対策がまだとられていない。女性が社会進出をしている現在、晩婚化や少子化は、女性が結婚しにくい、子育てをしにくい体制によってもたらされている。女性が高い能力をもっている今、女性に対して（制度的に）優しくない企業は、今後成長できるのか。私は、できないと思う。逆に、男性も女性も同じように能力を発揮できる企業は、確実に成長するのではないか。私は、すると思う。結婚・出産後に再び戻ってきやすい職場は、とても魅力的だ。就職する企業は、女性としては私は、このような企業がいい。この企業のためになら一生懸命働ける、自分が大いに成長できるという企業を早く見つけて、理想に少しでも近づけるように努力したい。

26　人生・職業・社会Ⅰ（平成20年度前期）

職業キャリア導入教育科目では、オンデマンド学習システムを構築し、情報ネットワークを使って、授業内容を学生がいつでも繰り返し学習できる環境を整えることになっている。平成19年度（2007年度）後期に試行的に実施した「人生・職業・社会Ⅰ」の授業内容は、このオンデマンド学習システムを用いて学習できるようにした。そこで、平成20年度（2008年度）前期に開講した「人生・職業・社会Ⅰ」では、せっかく構築したこのシステムを用いて授業を実施した。

第１回の授業では、オンデマンド学習システムの使用法や授業の進め方などについて受講者に説明しなければならないので、前年度と同様の仕方で授業を行った。しかし、第２回以降の授業では、受講者があらかじめオンデマンド学習システムで学習して、論評文を作成してから授業に出席するようにした。そのため、授業では、「三角（参画）討論」と「全体討論」だけをじっくり行うことができた。ゆとりのある時間配分で、じっくりと発表と討論ができたので、受講生にも好評だった。「話し合いが楽しいので、授業が楽しみ」「たくさん話し合うと、それだけ力がつく」といった感想が多く寄せられた。オンデマンド学習システムを有効に活用することができたと言える。

キャリアの視点からの英語学習講演会の内容については、いろいろの関係でオンデマンド学習システムに搭載することができなかった。受講者数は、79人だった。

参考として、授業で提出された作文を各回につき１例ずつ紹介する[23]。作文のタイトルは、受講者本人が付けたものである。

【第１回】私だけの生きる意味を創る

私もよく自分の生きる意味を考える。それを見つけたくて大学に入った。今日の話で、生きる意味は自分で創りあげるものだと聞いて、少し安心した。これから私は、私らしい、私だけの生きる意味を創っていきたい。

そのために何をするか。まだ、たった18年しか生きていない。そんな私の視野は、きっととても狭いだろう。もっとたくさんの経験をして視野を広げていくことが、私にはまず必要だ。長い人生の中で、もしかしたら生きる意味はなかなか創ることができないかもしれない。あるいは、いつのまにか完成されているのかもしれない。どうであれ、私はとにかくもっとたくさんのことに触れていこうと思う。

私は今、学生であり娘である。この役割も、考えてみれば私の生きる意味かもしれない。私が元気だとうれしいと母は言う。母を幸せにする、私の生きる意味。こんな素敵な意味を、欲ばってたくさん創っていきたいと思った。

【第２回】私は何者か

現時点で、私にとっての「生きる意味」とは、自分が何者であるかを考え探していくことである。自分が望む将来に向かって努力し、その足跡を定期的に振り返る。そのことで、長い人生の間に、「自分はこうなりたくて、こ

んなふうに努力してきたのだ」と実感できれば、私にとっての「生きる意味」が存在していると思える。

「生きる意味を探さない方が良い」「探しても分からない」という意見があった。私は驚いた。確かに、探せば必ず見つかるという保証がない以上、その意見にも頷ける部分もある。しかし、私は「生きる意味」を探していきたい。たとえ自分を振り返って、何のために生きてきたのか明確にわからなかったとしても、私は落胆しない。自分が何者であるかを常に模索してきたということは、私にとって大きな財産になるだろうし、それまでの過程は決して無意味なものではないと思うからだ。

【第３回】「人のため」が「自分のために生きること」である

人生とは何なのか。その答えは未だ分からないけれど、生きていることには意味がある。人生を天気にたとえてみると、人生の天気は変わりやすい。ある人が言ったたった一言で、嵐が吹き荒れることもある。雲が吹き飛ばされて晴れることもある。自分もまた、他人の天気に影響を与える存在である。

人は一人では生きていけない。だから、お互いに助け合い、支え合って生きていく。自分の生きる意味は未だ分からないけれど、自分が誰かにとって意味のある人間として存在しているなら、それは意味のあることである。できるだけ、他人の心の雲を吹き飛ばす存在でありたい。自分のためだけに生きていては、私は生きる意味をすぐに見失ってしまいそうになる。だから、私は自分のためにも、他人の心の雲を吹き飛ばして生きていきたい。自己満足かもしれないが、そうすれば生きる勇気が湧いてくるから。

【第４回】悩むことは悪いことではない

今回の講義は、とてもためになった。私もささいなことで悩んで悩んで落ち込むタイプだからだ。「悩んでいる自分を客観視する」などということは、今まで考えもしなかった。悲観的に自分を見ても、何も変わることはない。逆に、どうにもならないならしょうがない、次はがんばろうと肯定的になれば道が開ける。「生きる」ということでも、同じことが言える。「生きる」ことを否定できない以上、「生きる」ことを肯定的に捉えた方が得である。

そのためには、失敗したことや、他人と比べて自分が劣っていることをくよくよ悩むのではなく、一日一日の楽しかったことや、嬉しかったこと、感動したことなどを大切にする必要がある。そのような小さな出来事に出会うために「生きる」のも、立派な「生きる意味」になるのではないか。今まで

私は、「生きる意味」を探すことにやっきになっていた。しかし、考えてみれば、職業も社会における役割も、それ以前に「生きる」ということが前提としてある。

【第５回】悩むことにより起きる自己肯定

私は「悩む」ということは、自己否定につながると考えていた。だが、それは違っていた。私が今回知ったことは、「悩む」ということは、自己を評価し向上させようとしているから発生するのであり、無意味な自己否定とは違うということだ。

私たちは、自分という存在を大切に感じるから、つまり自己肯定をしているから悩む。「悩み」というものは、自分が今の状態に何らかの疑問をもち、前へと進もうとしているときに発生する。普通、自分の人生を丁寧に生きようと思わなければ、前へ進もうと考えないだろう。前へ進もうと考えなければ、悩みは発生しないだろう。

つまり、「悩む」という行為は、社会的存在である人間としての私たちを成長させるものである。私は、人間として成長するために、自分の中にある「悩み」と素直に向きあい、自分を磨いていきたい。

【第６回】ハッピーキャリアへの第一歩

私は将来就きたい仕事を探している途中である。中学校や高校でも自分の進路について考えてきたが、曖昧なイメージしかもつことができなかった。しかし、今回の講義で、その理由に気づいた。職業や雇用に関する私の知識が不足していたからだった。

今まで私は、自分がやってみたいと思う仕事に必要な技術や資格のことばかりを考えていた。「自分が興味をもった分野にどんな企業がどんな目的で取り組んでいるのか、そこで働くとどんな働く形態や将来の自分のライフスタイルが予想されるか」ということなどは考えたことがなかった。こうしたことを考えることが、将来について具体的にイメージするには不可欠だった。

私は今、ようやくスタートラインに立つことができた。これから４年間の大学生活で、自分が本当にやりたいことだけでなく、それをどこでどのようにやるかを探していく。それが私にとってのハッピーキャリアへの第一歩だ。

【第７回】不確かな未来予想図

弱冠18歳の私に、老後の生活まで考えろと言われても、正直言って困る。どんな職業に就きたいのかさえ未だにはっきりとしていない私が、60歳を過

ぎた自分をどうして想像できるだろうか。

退職と年金生活の間にある５年という途方もない時間。少しずつ少しずつ低所得者に残酷になっていく介護保険制度。知識としては知っていた。憤ったし、気の毒に思った。しかし、やはりどこかで他人事だった。そこで、無理にでも想像してみることにした。望んだところに就職できるだろうか。早速ここでつまずきそうだ。退職まで無事でいられるだろうか。リストラという単語が頭をよぎる。きちんと退職金をもらえるのか。否、その前に、結婚しても仕事は続けるのか。様々な不安要素がごろごろと転がっている。

今の私にはとても見通し切れない未来だが、時間は決して止まらない。私にできるのは、現実から逃げない覚悟をもつことだけだ。

【第８回】夢追い型から脱出する

若者の職探しの分類でいうと、私は「夢追い型」に近い。将来やりたいことは、自分の中に漠然とだがある。しかし、目標達成のために何をすればいいのか、まったくわからない。解決策を見つけようともせず、毎日がただ過ぎていくばかりだ。最近、私はそんな自分が嫌になる。口で言っているばかりでは、何も見えてこない。行動が伴わなければ、まったく意味がない。

現在、雇用情勢が改善されている。景気が回復し、団塊の世代が大量退職するからだ。そんな恵まれた時代に就職する自分だが、このままではチャンスを逃してしまうだろう。未来の自分のそんな姿を想像すると、今何かしなければと強く思う。だから、これからは、口ばかり、考えるばかりではなく、まず行動していくことから始めたい。未来の自分が少しでも幸せな人生を送れるように、私は今、この時期に努力していくようにしたい。

【第９回】メディアリテラシーの先へ

自分が受け取る情報や周囲の情報について冷静かつ批判的な判断を下す能力、それがメディアリテラシーである。私はある時まで、メディア、特に新聞の情報を疑いもしていなかった。しかし、たまたま自分が詳しく知っているある事柄がテレビで報道されているのを見た時、おかしいと思った。確かに、嘘ではない。だが、どう考えても説明不足で、何も知らない人が見たら絶対に勘違いすると思った。その時から、メディアはすべてを伝えているわけではないと、はっきり認識するようになった。

しかし、私はその後、疑いをもつことはしても、その先の真実を知ろうとしていただろうか。この報道はおおげさではないかと考えても、そこで終わっ

ていたのではないか。私たちがすべての情報について真実を知ることは、当然不可能である。しかし、これからは、自分が本当に必要とする情報についてだけでも、自分の力で考えていくべきだと思った。

【第10回】流されやすい日本人

「日本は世界で最も学費が高い国」。そんなこと、この授業の資料を見るまで知らなかった。いや、知ろうともしていなかったというのが、正しいのだろうか。私は、親が必死に働いて得たお金に頼り、奨学金を貰い、大学に通うことができている。もちろん、だからこそきちんと就職し、親を安心させなければと考えていたが、学費がなぜこんなに高いのか？という問いには、考えが至らなかった。その理由は、この国ではそれが当たり前だと認識されているからだ。

世間が当然だと認識することに、私は見事に流されている。そして、そのことに気づきもしなかった。もし世の中が、戦争は当たり前、ピストルの所持は普通になったら、私はそれにも流されてしまうのだろうか。それは絶対に嫌だと思う。自分でしっかりと考えること、疑問に思うことの大切さを実感した。日本人は周りに流されやすいと言うけれど、何も見ないまま、考えないままに流されていては、気づけば恐ろしい場所にいるということにもなりかねない。

【第11回】一人でも多くの女性が社会で活躍し、女性の社会的地位を向上させる

女性の非正規雇用率の高さに私は驚いた。なぜなら、私はこのまま大学を卒業し、どこかの会社で正規雇用で働いているだろうと、ぼんやりと考えていたからだ。しかし、女性の半分は非正規雇用で働いているそうだ。私は自分が希望する業種で、しかも正規雇用で働けるのだろうかという不安を抱いた。

私は、この不安と同時に、悔しさも覚えた。今まで男性と同じように勉強してきたのにもかかわらず、女性というだけで正規雇用で働けないことがあるからだ。私は、この問題は日本社会の風潮だから仕方がないと諦めたくない。だからといって、学生の私にできることは数少ない。だから、私のできることの一つとして、今は就職に向けて大学で多くのことを学び、社会に出た後、男性よりも活躍できる力を養う。一人でも多くの女性が社会で活躍し、女性の社会的地位が向上することを願うと同時に、私もその一人になれるよ

うに、様々な経験を積んでがんばりたいと思う。

【第12回】今の行動が未来を切り開く

講義のまとめを聞いて私が感じたことは、法律は少しずつ改正され一歩ずつ良くなってきているが、私たち国民の感覚がそれに追いついていないということである。家事や育児をするのは母親だという固定観念が今でも残っているし、「女社長」や「女医」という言葉はあるのに「男社長」や「男医」などは聞いたことがない。私たちは気づいていないところで、未だに男女差別を継続して行っている。こうした事態に目を向け、気持ちの面を改善しなければ、男女差別はなくならない。

改善のために私たちがするべきことは、均等法成立直後の女性たちが行ったように、自ら差別に立ち向かっていくことだ。「女性には無理だ」と言われていることにも積極的に挑戦したり、女性がしたことのないことに取り組んだりする。男性も家事や育児に参加したり、女性に対する偏見を捨てたりするべきだ。このようなことを意識して行動し、いつかそれが普通のことになれば、未来の社会では差別などなくなるはずである。

【第13回】考えて、書いて、知る

「人生・職業・社会Ⅰ」の授業を受けて、私は現実を知った。社会では、非正規雇用が増えている。このような状況の中、正規で雇用され身分が保障されながら働くことは難しい。女性の社会進出が進んできたとはいえ、女性が社会で働くには、男性よりももっと困難が多い。生活するためには働かなければならない。同じ働くなら、楽しく充実している方がよりよい。私は近い将来、楽しく充実した生活を送れるのだろうか。

この授業では、はじめに「生きる意味」について考えた。生きる意味は、感動することである。生きる意味は、自己を肯定することである。生きる意味は、そもそも存在しない。などなど、さまざまな意見があった。しかし、私には、どの意見もぴんと来なかった。私は、自分の生きる意味は自分で作るものだと思う。何千年も前から、多くの人が生きる意味を考えてきた。しかし、いまだに多くの人が生きる意味を考えている。それは、きっと、みんな自分がこれだと思う答えがなかったからだ。自分が納得できる生きる意味を探すことは難しいということだ。だから、自分の生きる意味を自分で作ればいい。人は成長するから、普遍的な生きる意味でなくていい。今の私が生きる意味を作ればいい。その過程で考えるということが大切である。たとえ

答えが出なかったとしても、考えることで人は成長することができる。

次に、ハッピーキャリアについて考えた。そのときに、書くことの大切さを知った。この授業では、毎回400字の作文を書いてきた。考えは表現しないと伝わらない。だから、自分の考えを自分の言葉で表現することが大切だ。しかし、とても難しいことでもあった。400字の作文を書き始めた当初は、書き上げるのに２～３時間かかっていた。そして、長い時間をかけても、自分が伝えたいことをうまく書けていなかった。しかし、何回も400字の作文を書くことで、自分が伝えたいことを書けるようになってきた。訓練は必要である。

また、書くことには、①自分のことを振り返ることができる、②セルフカウンセリングの効果がある、③「書くこと」自体に成功を引き寄せる力があるということを知った。③の効果についてはまだ実感したことはないが、①と②の効果については私も同じ考えである。私は高校生のころから、毎日２～３行の日記を書いている。書くためには、その日一日を思い出さなければならない。だから、その日の自分を振り返ることができる。また、自分が思ったことを書くことで、頭が整理される。自分を客観視できる。他人の責任だと思っていたことも、実は自分の責任だったと気づくことも多かった。自分が伝えたいことを表現し、自分を振り返ることは必要である。

最後に「職業や社会の現実」を考えたとき、知ることの大切さを感じた。自分に知識がないと、情報を鵜呑みにしてしまう。人の話を完全に理解することができない。たとえば、私は「試合に勝ったチームが、負けたチームの分まで頑張る」ということの意味がよくわからなかった。勝ったチームは負けたチームのことを考えなくてもよいと思っていた。きれいごとだと思っていた。しかし、高校で私の考えは変わった。私が部内戦の１次リーグで勝ち残り、２次リーグに進んだことがあった。しかし、２次リーグでの私の試合は最悪だった。１次リーグで私に負けた人たちは、２次リーグの私の試合を見てどう思っただろうか。「自分が出ればもっとよい試合をしたのに」と思っただろうか。そのときに、私は「負けた人の分まで頑張る」ことの意味がわかった。負けた人は次の試合に出られない。負けた人たちの代表者として自分が頑張らなければならないのだと気づいた。この体験がなかったら、きっと今でもきれいごとだと思っていたかもしれない。

知ることは、経験することである。経験は、体験することだけでなく、伝

聞も含む。経験を積むことでわかるようになることは多い。就職の話はまだまだ先のことだと思っていたが、就職についてはよく考えなければならない。楽しい生活が生活に潤いを与え、充実した生活が楽しい生活につながる。プラスのスパイラルを作りたい。自分が興味があり好きな仕事をしたいが、それにはそれ相応の努力をしなければならない。また、そもそも自分がしたいことだけができる仕事はまずないから、嫌なことがあっても続けていけるくらい好きな仕事を見つけたい。興味のないことからも、楽しさを見つけることができるタフさも身につけたい。人生に無駄なことは何もない。大学時代に何を学ぶか。今の私にできることは、考え、書き、知ることだ。ほんの少しの勇気を出して、様々な人と出会い、様々なことに挑戦していく。

27　キャリア・デザインⅠ（平成20年度前期）

職業キャリア導入教育において「人生・職業・社会」と並んで設定された科目が「キャリア・デザイン」[24] である。１年次学生が「人生・職業・社会Ⅰ」で現実を認識し、「人生・職業・社会Ⅱ」で現実と自分のかかわりについて考えを深めることを想定している。その後で、２年次学生が「キャリア・デザインⅠ」で福岡女子大学の卒業生との対話を通して自分自身の進路について考えを深め、「キャリア・デザインⅡ」で本学卒業生にかぎらず、社会で活躍する女性との対話を通してさらに考えを深めることを想定している。

平成20年度（2008年度）前期に、「キャリア・デザインⅠ」の授業を初めて実施した。授業のねらいは、本学卒業生（先達）との対話を通して、学生の一人ひとりが自己概念を確立し、有意義なキャリア形成ができるように、自分自身の進路について考えを深めるようになる点にある。学生の到達目標としては、次の３点を掲げている。①本学卒業生（先達）の人生観と人生行路を認識し、それを自分自身の進路選択の参考にすることができる、②毎回の授業での対話をもとに、ゲスト・スピーカーへの手紙を書くことができる、③授業で認識したことをもとに、自分の進路選択について自分の意見を発表することができる。

授業の進め方は、次の３段階になっている。①各学科から推薦されたゲスト・スピーカーが30分程度の講義を行う、②ゲスト・スピーカーと受講者が

30分程度対話を行う、③ゲスト・スピーカーに対して受講者が30分程度で400字の「お礼の手紙」を書く。この授業では、各学科の教員が分担して司会進行を務める。「お礼の手紙」は授業終了直後にコピーして、ゲスト・スピーカーに手渡している。

第１回目の授業では、とりあえずの練習ということで、本学の女性職員にゲスト・スピーカーを務めてもらった。第２回～第13回は、毎回１人ずつ、12人の卒業生にゲスト・スピーカーを務めてもらった。第14回目の授業では、受講者はそれまでの13回の対話を通して認識したことをもとに、「進路選択についての私の考え方」について2,000字の作文をあらかじめ書いてきてから出席することにした。この授業では、いきなり「三角（参画）討論」を行い、その後じっくりと「全体討論」を行った。第15回目は、期末試験に当てた。受講者数は、47人だった。

参考として、授業で提出された作文を各回につき１例ずつ紹介する[23]。「お礼の手紙」にはタイトルが付けられていない。ゲスト・スピーカーのお名前の部分は割愛した。

【第１回】

今日はお話をしてくださって、ありがとうございました。お話を聞いていて、前向きな方だという印象を受けました。県庁職員であるという同じ職種でも、仕事内容がかなり違っていることに驚きました。そんな中で仕事をこなしてきても、「やめたいと思ったことはない」ときっぱりとおっしゃっていたことや、「必要な知識は自分で身に付け、与えられた仕事を積極的にこなしてきた」とおっしゃっていたことが、「前向きな方だ」という印象につながったのだと思います。

今回の「キャリア・デザインⅠ」の授業では「働く女性の話が聞ける」ということだったので、楽しみにしていました。そして今日、公務員の仕事について聞くことができて良かったです。私の進路はまだ定まっていなくて漠然としています。自分のどちら側に道が広がっているのかも分かりません。今回のお話を含め、今後、働く女性からお話を聞くことで卒業後の進路を探していきたいです。

【第２回】

私は今日のお話を聞いて、自分と向き合うことの大切さを改めて感じまし

た。私は現在２年生ですが、将来どんな職に就きたいとか、どんな会社に就職したいとかいうような具体的な見通しはまだ立っていません。お話の中に出てきましたが、私も同じで、１年生のときは大学という新しい環境に慣れるので精一杯でした。将来についてゆっくり考える余裕がありませんでした。あっという間に２年生になってしまい、将来自分がしたいことをどうやって見つければいいのか分からずに悩んでしまうこともあります。

しかし、今日のお話を聞いて、自分がこれからすべきことのヒントを頂くことができました。自分に合った職に巡り合うことは難しい。しかし、自分に合った職に巡り合うかどうかは、学生時代にかかっているということを実感しました。学生時代に体験したことや頑張ったことを将来に活かせるように、大学時代にたくさんのことにチャレンジして頑張っていこうと思います。

【第３回】

今日はお話をしてくださって、ありがとうございました。とても分かりやすく、そしてポイントが絞られていたので、お話を聞いていておもしろかったです。特に、内向的な性格でも営業はできるという部分が印象深かったです。私もどちらかと言えば内向的なので、営業という職に就いている自分を想像することはできませんでした。しかし、仕事上で心がけておられることを聞いて、営業に向いているのはすべてが外交的な人ではないということが分かりました。

私は営業という職を勝手にイメージして、私の選択肢から外していたのですが、就職先の一つの候補として営業が加わりました。また、生命保険がオーダーメイドであることを初めて知りました。私の保険のことは両親がしてくれているので、その人に合わせて内容を変更できるということを知りませんでした。既製品を売るよりも、お客さまに合わせて自分で変えられる方がやりがいがあるのだろうと感じました。今日は本当にありがとうございました。

【第４回】

今日はお話をしてくださって、ありがとうございました。初めに配付された資料の略歴を見て、ご経歴に興味をもちました。在学中にご結婚なされて、私たちには分からないご苦労がたくさんあったと思いますが、これからが楽しみが多いとおっしゃっていたときの表情が印象的でした。その笑顔は、「心がけ」の中の「プラス思考」や「迷うなら進め！」というところから来ているのだろうと思いました。

子育てをしながら仕事をするのは、大変なことだと思います。私は器用な方ではないので、どちらか一方しかできないのではないかと考えていました。しかし、今日のお話を聞いて、大好きな守るべき家族がいて、大好きな仕事があれば、両立も可能なのかなと思いました。例にあがっていたゴキブリのお話のように、守るべきものがあれば、私も強くなれる気がしてきました。とても53歳には見えないキラキラ輝く笑顔を見させていただき、守るべきものに出会う時が楽しみになりました。

【第５回】

貴重なお話をありがとうございました。今日のお話を聞き、今の甘い自分に鞭を打たれたようでした。今までぼんやりしていた自分の希望や目標が、演習シートに実際に書き込むことによって、かなり明確になりました。授業後にまた真剣に考え、自分ともっと向き合おうと思います。

私たちに贈ってくださった「自愛・自信・自立・自律」というこの４つの「自」に私は強く感動しました。私を支える言葉になりました。他人を愛するように私を愛し、愛することで自分自身を信じることができる。それが自分を一個人としての自立へ導き、そこから自分を律することができる。この連鎖関係は今後の私に大きくかかわるものなので、大切にしようと思います。

また、今日のお話を聞き、将来の職の目標を発見することができました。それは「笑」です。笑みは自分にパワーを与えるだけでなく、他人も幸福にするパワーをもちます。これからの人生の目標の一つとして、「笑」を掲げていたいです。

【第６回】

私は今日の講義で、「自分を育てる」という言葉が印象的でした。若いうちから、自分が何をしたいのか、何をしたら自分は食べていけるのかを考える。それが大事だと感じました。

私はというと、自分が何をしたいのか、まだわかっていません。そんな私を見越して、周りの人や家族から、「ああしたらどうだ」「これはどうだ」「あれは向いてない」「これは無理だ」などと口を出されました。私は、何をしたらよいのか、ますますわからなくなりました。しかし、大学に入り、一人で暮らし始めて、自分という人間がどんな人間かわかってきたような気がします。

周りの人に何を言われても、結局は「私の人生」であって、所詮、周りの

人は周りの人。責任をとるのは私自身なのです。ゆえに、私の進路・将来のことを私が真剣に考えなければなりませんが、慎重になりすぎて身動きがとれなくなるよりも、失敗してもいいからまず行動にでようと私は思いました。

【第７回】

今日はお話をしてくださって、ありがとうございました。私は就職でマスコミ関係は考えていないのですが、興味深くお話を聞くことができました。私はアナウンサーという職業は、取材で話を聞きに行ってそれにナレーションをつけるだけの職業だと思っていました。しかし、取材内容の選択から字幕の挿入まで、さまざまな仕事をしていらっしゃることを知りました。

お話を聞いて、行動力が素晴らしいと感じました。自分のやりたいことが見つかってからの積極的な行動は、とても素敵です。昨年、女子大で同じ１年生で、授業を受けながら受験勉強をして、今年、ある大学の１年生になった友達がいます。その友達も目標を高くもち、理想を描き、積極的に行動していました。今日のお話にはその友達の姿と重なる部分が多くありました。私もその友達や今日のお話のように自分をしっかりもとうと思いました。まずは理想を描くことから始めます。今度、テレビで拝見するのを楽しみにしています。

【第８回】

今日は大変良いお話をありがとうございます。女性がもっと声を上げて良い、上を目指すべきだとおっしゃる力強い姿勢に、大きなエネルギーを感じました。主にカナダの労働形態のお話を聞いて、日本との違いにショックを受けました。今の日本では、生きる（生活）のために働くのではなく、働くために生きているような状態になっていると思いました。カナダでは可能なことが、技術も制度も良くなった今の日本でなぜ出来ないのか、本当に不思議です。この疑問をここで止めずに、「私たち」が意志を高くもち変えていくことが必要なのだと学びました。

また、ワーク・ライフ・バランスやファミリー・フレンドリーなど、男女共同参画社会をより実現させる取り組みがあることを知りました。これは私が就職活動をする際のポイントになりそうです。福岡県ではどんな企業が表彰されたのかを調べようと思います。将来は、いかなる形であっても、自分の働きや考えが今後の社会に少しでもプラスになるような仕事がしたいです。そして、今日のお話のように、人に力を与えられる女性になりたいです。

【第９回】

今日は貴重なお話をありがとうございました。渡米された方から、アメリカではなく日本の伝統文化についてお話を聞くことは、私にとってとても意外でしたが、興味深い内容でした。

今日のお話を聞く中で、外国人への教育という視点から見た日本文化は、たいへん新鮮でした。アメリカという他の国を意識して、自分の国を改めて浮き彫りにすることができました。また、自分の国のことでありながら知識もないし、それについての自分の考えもないことを痛感し、心から恥じ入りました。

他国、他文化との交流において私が最も重要視していたのは、英語でした。しかし今回、そうではないことに気づきました。英語はあくまで道具であり、伝えたいものは別で、今回のお話ではそれは「心」だということです。このことは、就職についても言えると思います。将来のために私に必要なのは、テクニックではなく「心」だということを忘れずに生きていきたいです。

【第10回】

今日は貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。お話の中で、私達が生きていくうえでは人間関係が何よりも大切であると感じました。私達は人と人との関係の中で生きていて、たくさんの人に支えられています。人に支えられるだけでなく、私も人を支えられる人になりたいと思いました。

たくさんの素晴らしいキャリアを積まれているにもかかわらず、ゴールを決めずに常に向上心をもって日々精進していらっしゃるお姿が、とても素晴らしいと感じました。自分の限界を自分で決めてしまったらそれ以上先に進むことはできないと思うので、私も学生のうちから向上心をもって今よりも上を目指す姿勢を養いたいと思います。日頃の挨拶や生活態度など、身近なところから自分を高めていこうと思っています。そして、常に先を見据えて行動できるように改善していきたいです。

【第11回】

本日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。企画という仕事は、アイデアを出すだけでなく、商品を作って、情報を集めてなど、様々なことをしなければならないということがわかりました。他社と違うコンセプトを考えたり、同じ分野の商品の中から消費者に選ばれるものをいかにし

て作るかを考えたり、とても大変そうです。

今の職にお就きになる以前にもいろいろなことをなさっていましたが、すべて食品にかかわる仕事をなさってきたというのはすごいと思いました。一つのことばかりに力を注ぐのは、つぶしがきかなくなる気がして恐いです。でも、専門性を追求していたら自然と他のことにも広がっていくものだというお話を聞いて、とても意外でした。私はずっとかかわっていきたいと思えるものをまだ見つけてもいないのに、始める前から恐がっていてはだめだと感じました。今興味があることに一生かかわりたいのかどうか分かりませんが、できるだけのことはしていきたいです。

【第12回】

今日はお忙しい中、本当にありがとうございました。私は、「苦労した先に分かるものがある」というお言葉に胸を打たれました。私は全然苦労していない気がするので、若いうちの苦労は買ってでもしろと言うし、苦労する場に身を置かなければなぁと思いました。「自分の感情で物を言わない」というお言葉も胸に刺さりました。論理の組み立ては一番苦手と言っても過言ではない私なので、なんだか危機感を抱きました。やっぱり、勉強しなきゃいけないんだなぁと強く思いました。

立派な人はみんな勉強している人なんだと思います。お話の中に出てきた仕事に対する考え方も素敵です。私の場合は「日々の糧を得るために働く」という感じなのですが、お話では「自己実現のための仕事」という感じだったので、それはすごくかっこいいと思いました。適性はやっぱり多少は変化していくものだと思うけど、しっかり見つめてみないといけないとも思います。今日はありがとうございました。

【第13回】

今日はお忙しい合間をぬって講義をしてくださって、ありがとうございました。とても楽しくて、あっという間に時間が経ちました。アナウンサーといえば、もう私たちとは別世界の人だと感じていました。しかし、今日の講義ではありのままのお姿をみせていらっしゃるという感じで、すごく素敵な方だと思いました。

私は今２年生で、来年、就職活動が始まります。就職活動をする前までに自分がしたいことを決めなければと思っていましたが、会社の方針に合わせて自分を変えるのではなく、ありのままの自分を受け入れてくれる会社を選

ぶという考え方もあったのだと思いました。また、大学のうちにしかできないことに、もっとチャレンジしようと思いました。自分の将来のためにと考えるのではなく、何事にも積極的にチャレンジしていくのが良いという言葉が印象的でした。キャリアのためと考えるのではなく、もっと肩の力をぬいて様々なことに励んでいきたいです。

【第14回】進路選択についての私の考え方

「キャリア・デザインⅠ」の授業を受けてきて、さまざまな職業に就かれている福岡女子大学の卒業生に私は出会った。卒業生のお言葉には、力強いパワーがあった。私がこれから生きていく中で、忘れずに心に留めておきたいものばかりだった。

お話をしに来てくださった卒業生は、みな生き生きとなさっていた。目がキラキラと輝いていた。それはきっと、常に夢をもたれているからだ。夢に向かって努力なさっているからだ。夢は人に生きる力を与えてくれると私は改めて感じた。

「就職はゴールではない。スタートである」というお話を聞いたとき、私ははっとした。自分の中で、就職がゴールのように思っていたからだ。しかし、それは違う。ゼロの自分から、社会人としてスタートするのだ。働き始めてから資格を取ったり、勉強をし直したりすることがあることを私は知った。学ぶというのは、学生で終わりではない。人は一生、夢をもち、学び続けるのである。

夢は一つでなければならないと、今まで私は思っていた。今の私には、やりたいこと、興味のあることがたくさんある。その中から、無理に一つを選ぼうとしていた。だから、私は苦しんでいた。しかし、夢を一つに絞らなくてもよいことに気づいた。いろいろなことに興味をもっていると、将来の可能性が広がる。だから、今はどんなことにも関心をもつことを大切にしたい。普段何気なく見聞きしているものにも、すべて意味があり、次へとつながっている。何事も、ただ見て、ただ聞いて、それで終わりにしてはいけない。常に何かを学び、考えを深める姿勢が大切だ。

夢を実現させるためには、心がけておくべきことがある。１つめは、体の使い方である。上を向いて、悲しいと思えるか。下を向いて、幸せだと思えるか。体の使い方次第で、人の感情は変えられるということを私は知った。胸を張って、前を向いて、明るく前向きな気持ちをもっていたい。２つめは、

言葉遣いだ。ネガティブな言葉を遣ってはならない。その一つに、“can’t”がある。「できない」というのは、自分が勝手に決めつけたことである。そこですでに諦めている。私は「諦める」という言葉が嫌いだ。やると決めたら、自分を信じて最後までやり通したい。最後に３つめは、積極性である。卒業生の一人がおっしゃった「迷うなら進め！」という言葉が私は気に入った。私は何をするにしても、一度頭で考えてから行動してしまう。そのことが、時に自分の行動を制限してしまうことになる。私は自分に、「迷うなら進め！」と言い聞かせたい。知らない世界にもどんどん飛び込んでいきたい。「いっぱい失敗してもよい。失敗は次につながる道になる」という言葉も印象に残っている。失敗したら、そこから何かを学べばよい。だから、失敗を恐れず、たくさん失敗するために、たくさんのことに挑戦していきたい。

私の目標の一つは、信頼される人になることだ。この人なら大丈夫。この人が言うなら耳を傾けよう。そう思ってもらえる人は素敵である。「仕事ができるから、多くの仕事が任せられる。忙しい日々を過ごす」というお話を聞いたとき、なるほどと思った。就職したばかりの頃は、わからないことだらけで雑用も多いはずだ。しかし、自分ができることを見つけて、一生懸命取り組んでいると、いつか必ず「仕事を任せられる人」になれると思う。そして、私はいつも「人を見上げる人」でありたい。尊敬する人、目標とする人に近づくために、自分に磨きをかけていくことは、とても大切なことである。

今まで私は、結婚をして、子どもが生まれたら、仕事を辞めたいと思っていた。しかし、男性の中でも力強く働いてこられた卒業生のお話を聞いて、そう思わなくなった。自分の強みとなるものをもっていれば、社会から必要とされる人であり続けることができる。現在は、仕事と家庭の両立が、昔よりはるかにしやすくなった。このような社会になったことに、私は感謝したい。

10年後、私は30歳である。私の将来計画では、すでに結婚している歳だ。実際はどうなのだろうか。幸せな家庭をもっていても、仕事が楽しくて独身だったとしても、私が幸せであってほしい。10年前の私は、大学でたくさんのことを学んでいる。将来についても、いろいろと悩んでいる。10年後の私はどうなっているだろうか。自分の強みとなるものをもっているだろうか。10年後の私が生き生きとしているためにも、今の私はがんばらなければなら

ない。

学生には自由な時間がたくさんある。自分磨きに費やせる時間を、私は存分に生かしたい。留学、ボランティア、教育実習。たくさんの知らない世界に足を踏み入れたい。家にいると、私はついだらだらしてしまう。なので、今年の夏休みはなるべく外に出て、たくさんの新しい発見をしたい。

以上が、現代GP（実践的総合キャリア教育の推進）への本学の申請の主な内容とこの１年間（平成19年度後期～平成20年度前期）の主な取組についてのまとめである。本学の取組「福女CEプログラム」はまだ緒に就いたばかりであるが、取組担当者としては、一層多くの方々のさらなるご理解とご協力を得て、今後ともこのプログラムをますます充実させていきたいと願っている。

註

（１）　たとえば、平成20年（2008年）８月７日に、IDE大学協会九州支部・九州大学の主催で、九州大学西新プラザにおいて、「大学におけるキャリア教育の現状と課題」と題するセミナーが催された。大江淳良（(有)ユニバーシティ・アクティブ代表取締役社長）の基調講演「大学のキャリア開発支援の現状」、高野良一（法政大学キャリアデザイン学部教授、学部長）の法政大学キャリアデザイン学部の取組についての報告、筆者（福岡女子大学文学部教授、キャリア支援センター長）の福岡女子大学の取組についての報告が行われた。その後、この３人による総括・討議も行われた。「大学におけるキャリア教育」と言えば、往々にして「就職対策」と受け止められがちだが、学生に対して「キャリア開発支援」ないし「キャリア形成支援」を大学がどう行うべきかについて熱心な討論がなされた。主催者側からは、「目から鱗が何枚も落ちるようなセミナーだった」との講評がなされた。

（２）　渡辺三枝子＋E. L. ハー『キャリアカウンセリング入門』ナカニシヤ出版、2001年、162頁。

（３）　渡辺三枝子＋E. L. ハー、前掲書、163頁。

（４）　中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」平成11年12月16日、第６章第１節。

（５）　吉田辰雄『キャリア教育論』文憲堂、2005年、38頁参照。なお、後述のように、福岡女子大学でも、平成18年度（2006年度）からの公立大学法人への移行を機に、従来の学生課・学生部委員会の組織が廃止され、１年間の準備期間を経て、平成19年度（2007年度）からキャリア支援センターが設置された。

（６）　大江淳良「キャリア開発支援とは何か」、『IDE現代の高等教育』483号、2006年、

９－15頁、９－10頁参照。

(７) 「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代 GP) とは、各種審議会からの提言等、社会的要請の強い政策課題に対応したテーマ設定を文部科学省が行い、各大学等から応募された取組の中から、特に優れた教育プロジェクト（取組）を選定し、財政支援を行うことで、高等教育の活性化が促進されることを目的とするものである。平成16年度（2004年度）から平成19年度（2007年度）までの４年間にわたって実施された。また、これに先立って、「特色ある大学教育支援プログラム」(特色 GP) も実施された。これは、大学教育の改善に資する種々の取組のうち、特色ある優れたものを選定し、選定された事例を広く社会に情報提供するとともに、財政支援を行うことにより、国公私立大学を通じ、教育改善の取組について、各大学及び教員のインセンティブになるとともに、他大学の取組の参考になり、高等教育の活性化が促進されることを目的とするものである。平成15年度（2003年度）から平成19年度（2007年度）までの５年間にわたって実施された。ちなみに、“GP” とは、“Good Practice” 略語である。また、文部科学省では、平成19年度（2007年度）から、「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」(学生支援 GP) というものを開始した。学生の人間力を高め人間性豊かな社会人を育成するため、各大学等の入学から卒業までを通じた組織的かつ総合的な学生支援のプログラムのうち、学生の視点に立った独自の工夫や努力により特段の効果が期待される取組を含む優れたプログラムが選定されることになっている。

(８) 梅澤正『大学におけるキャリア教育のこれから』学文社、2007年、１頁参照。

(９) 平成15年（2003年）４月10日に公表された人間力戦略研究会の人間力戦略研究会報告書『若者に夢と目標を抱かせ、意欲を高める～信頼と連携の社会システム～』では、「人間力」とは、「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」(10頁) と定義されている。

(10) 平成11年（1999年）６月23日に公布・施行された男女共同参画社会基本法第２条第１号では、「男女共同参画社会の形成」とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会を形成することをいう」と定義されている。男女共同参画基本計画（第２次）に、「2020年までに指導的地位に立つ女性の割合を少なくとも30％程度」に高めるという目標が明記され、そのための取組が進められてきた。しかし、その進捗は十分ではない。女性の社会的参画、特に意思決定過程への女性の参画は、遅れている。国際的に見ても、低水準である。指導的地位に立つ女性の割合は、わが国の場合、たとえば衆議院議員で9.4％、参議院議員で17.8％、都道府県議会議員で7.3％、民間企業課長相当職で3.6％、国家公務員管理職で1.7％、都道府県の地方公務員管理職で5.1％、医師で17.2％、研究者で12.4％となっている。国連開発計画のジェンダー・エンパワーメント指数（GEM）は93ヶ国中54位、世界経済フォーラムのジェンダー・ギャップ指数（GGI）は131ヶ国中91位となっている。こうした現状を改善するために、平成20年（2008年）４月に、男女共同参画

推進本部において、「女性の参画加速プログラム」が決定された。このプログラムでは、「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の実現」「女性の能力開発・能力発揮に対する支援」「意識改革」の３つを総合的に実施することが、施策の基本的方向として打ち出されている。

(11)　平成18年（2006年）４月の調査では、入学者の76%、在学生の74%が福岡県の出身である。

(12)　平成12年（2000年）の総務省統計局の「国勢調査」により、「女性の年齢階級別労働力率」を福岡県と全国平均を比較すれば、15歳～29歳はほぼ同水準、30歳～39歳はわずかに上回り、40歳～65歳以上はつねに下回っている。ちなみに、この労働力率は、わが国の場合、M 字型になることが知られている。また、平成16年（2004年）９月の「福岡県男女共同参画社会に向けての意識調査」、同年11月の「内閣府男女共同参画に関する世論調査」によれば、「子どもができても、ずっと職業を続ける」と考える女性は、福岡県で27.3%、全国平均で40.4%である。「出産で中断し、子どもが大きくなったら再び持つ」と考える女性は、福岡県で56.2%、全国平均で34.9%である。

(13)　グレートブックスとして、平成19年度（2007年度）中に、1,148冊を購入した。この冊数はタイトル数ではなく、１タイトルにつき複数冊数購入した数も含む冊数である。授業科目「人生・職業・社会Ⅰ」のために203冊、「人生・職業・社会Ⅱ」のために221冊。文学系の図書として、読書案内・読書のすすめ関係90冊、エッセイ10冊、日本家族史13冊、辞典関係30冊、洋書哲学系グレートブックス61冊、平凡社などの文庫本195冊、古代文学25冊、近代女性文献資料161冊。理科系の図書として、科学のとびら（東京化学同人）35冊、岩波科学ライブラリー70冊。その他の図書として、大学改革・リベラルアーツ関係図書34冊。

(14)　たとえば、平成20年（2008年）５月29日に開催された本学の FD 研修会では、久留米大学文学部の安永悟教授を講師に迎えて、「協同学習の基本的な考え方―学生の変化・成長を求めて―」というテーマで講演がなされた。講師が講演テーマについて「協同学習」の方式で講演するというスタイルだったので、受講者である本学教職員は講演内容を理解するとともに、協同学習の「実施方法」そのものも理解することができた。講師から、「さっそく明日から協同学習方式の授業に取組んでほしい」との要望が出されたので、筆者はそれ以降、担当授業科目のうち協同学習方式が導入できる科目では、この方式での授業を行っている。授業アンケートの結果を見ても、協同学習方式は、受講生からかなりの好評を博している。最近では、２年次学生（73人）の教育実習の事前指導を協同学習方式で行ったが、全実習校である本学近隣の４つの中学校のいずれにおいても、「今年の実習生は例年にまして積極的で優秀である」と評された。協同学習方式の事前学習が教育実習での積極的な態度につながっていると推察される。ちなみに、協同学習では、Think-Pair-Share という技法（①クラス全体に質問を与える、②一人で考える、③ほぼ同じ時間を使って、ペアで順番に考えを述べる、④クラス全体で話し合う）や Round Robin という技法（①クラス全体に質問を与える、②一人で考える、③ほぼ同じ時間を使って、

グループ内で順番に考えを述べる、④クラス全体で話し合う）を用いる。こうした技法は、本学で独自に開発して、「福女 CE プログラム」で用いている「三角（参画）討論」の技法に酷似している。三角（参画）討論は、学生が授業を聞いて、それに対する自分の考えを作文に書いた後で行う。一人用の机をきれいな正三角形に配置して３人グループを作って作文を発表し討論するので、三角討論と呼んでいる。この方式では否応なく討論に参画しなければならないので、参画討論と呼ぶこともできる。３人グループでの発表・討論の後には、クラス全体での発表・討論を行っている。

(15) 平成19年（2007年）８月６日に大学改革推進室が設置され、室長と事務局長の２人で出発した。同年10月１日からは、本学の現代 GP の取組期間中に主として現代 GP 関連の事務を担当する１人の専任職員がこの大学改革推進室に配置された。翌年４月１日からは、主として大学改革関連の事務を担当するもう１人の専任職員が配置された。

(16) 大江淳良、前掲論文（上記註（６））、15頁。

(17) 特集「大学でのキャリア教育の現状」Part 1 CDA 座談会「キャリア教育のシステム構築は、まだ試行錯誤の段階にある」、『JCDA ジャーナル』27号、特定非営利法人日本キャリア開発協会、2007年９月25日発行、2－12頁参照。

(18) 上記註（７）参照。

(19) つくね島環境修復プロジェクト（広島大学キャリアセンター現代 GP フロントランナープログラム企画）の Web サイト（http://blog.goo.ne.jp/amanjaku07/e/418ed504f04f8853553b0766cb030a3d）には、「五日市町誌より」ということで、次のような「あまんじゃく伝説」が紹介されている。「道空さんには子供がいましたが、いつも親の言うことにさからう言動をしていました。ある日、道空さんは死期に臨んで、心の中では海老山にお墓を建ててほしいと思っていましたが、日頃の子供のことを考えて『私が死んだら墓は津久根島に建ててくれ』と遺言しました。道空さんの死後、子供は今まで自分は父の言葉に背いた行動ばかりした親不孝者だった。せめて父の残した遺言だけは守って不孝のつぐないともしようと思いました。そして遺言のとおりに津久根島にお墓を建てました。これより以後、親の言葉にさからう者を『あまんじゃく』と呼ぶようになりました。」もちろん、「あまんじゃく」とは「あまのじゃく」（天邪久・天邪鬼）のことである。

(20) 本田由紀『若者と仕事』東京大学出版会、2005年参照。

(21) 法政大学キャリアデザイン学部では、アカデミック・スキルを養成するための基本テキストとして、2008年度は次の２冊を用いている。佐藤望編著『アカデミック・スキルズ』慶応義塾大学出版会、2006年。宮内泰介『自分で調べる技術』岩波書店、2004年。

(22) 「福女 CE プログラム」では学生の「読み書き討論能力」の向上を図るため、さまざまな機会に論評文（作文）を学生が書くように工夫している。学生が作文に取組むモチベーションを高めるために、「福女 CE プログラム用原稿用紙」という名称でオリジナルの400字詰め原稿用紙を作成し、キャリア支援センターなどで学生に

無償で配付している。

(23)　作文の選定は、キャリア支援センターの嘱託職員など、授業の補助業務を担当した３人の嘱託職員の協力を得て行った。作者名は匿名にしている。読みやすくするために、ごく一部に修正を加えたものもある。なお、授業で提出された作文は、キャリア支援センターで保管している。

(24)　もともと「先達との対話」という授業科目名を考えていたが、現代 GP への申請書の検討段階で、「わかりにくい」という理由から「キャリア・デザイン」に名称変更になった。しかし、平成20年（2008年）２月10日にパシフィコ横浜で開催された「文部科学省大学改革プログラム合同フォーラム」のポスターセッションで多くの大学関係者と意見交換を行った際、「先達から学ぶ」「対話によって学ぶ」ことが明確にわかるので「先達との対話」は優れたネーミングだとの指摘があった。